

広報おやべ 連載企画

猛将 木曾義仲

～倶利伽羅峠に想いを馳せて～



富山県小矢部市

義仲・巴プロジェクト推進班

新連載

猛将 木曾義仲《序章》

「倶利伽羅峠に想いを馳せて」

平安時代末期の「源平争乱（治承・寿永の乱）」において、平家打倒のために挙兵した武将木曾（源）義仲。

歴史の教科書で学んだとおり、木曾義仲が越中国（富山県）と加賀国（石川県）の国境にある倶利伽羅峠で平家軍と大激戦を繰り広げたという史実は多くの人が知っているものと思われまふ。源平争乱のターニングポイントの1つに数えられる「倶利伽羅峠の戦い（砺波山の戦い）」は、郷土の歴史に大きく関わっています。義仲とともに戦った女武者巴御前は、容姿端麗にして一騎当千の兵者といわれ、義仲へ一筋の愛を貫いた姿には崇高なラブロマンスを感じさせずにはおれません。

しかしながら、木曾義仲がどこで生まれ、どのように生き、どこで討ち死にしたのかはあまり知られていません。



源義仲騎馬像（埴生護国八幡宮境内）



義仲・巴の魅力を全国に！大河ドラマ誘致プロジェクト発動中！！

このたび、この「広報おやべ」において、「猛将木曾義仲」と題して、義仲の生涯と、源平争乱にゆかりの史跡を紹介する連載をスタートします。この連載では、木曾義仲の生き様や巴・今井兼平・樋口兼光らとの絆、家臣との信頼関係などのエピソードをとおして、義仲の魅力的な人物像について知っていただきたいと思っています。

また、小矢部市と義仲・巴ゆかりの自治体で組織する「義仲・巴」広域連携推進会議で取り組んでいる、木曾義仲と巴を主人公とした大河ドラマ放映実現に向けた活動についても関心を持っていただくとともに、活動へのご理解ご協力をいただければ幸いです。

源平ロマンに想いを馳せて…830年前にタイムスリップ！連載をどうぞご期待ください。

問い合わせ 観光振興課

☎(67)1760 内線732

猛将 木曾義仲

「倶利伽羅峠に想いを馳せて」

第1回 駒王丸誕生

源平合戦で活躍した武将木曾義仲の生涯をたどるシリーズ第1回目は、義仲の生涯について紹介します。

木曾義仲の正確な生年月日は分かりませんが、平安時代末期、今から約860年前の久寿元年（1154年）に生まれたと伝えられています。

ところで、読者の皆さんは、木曾義仲はどこで生まれたと思われまふか？

- ①京都府 ②長野県 ③群馬県
- ④埼玉県 ⑤神奈川県

「木曾義仲」と呼ばれていることから、読者の多くの人が、義仲は②長野県（木曾地方）で生まれたと答えられたのではないでしょうか。



木曾義仲産湯の清水（鎌形八幡神社）



義仲・巴の魅力を全国に！大河ドラマ誘致プロジェクト発動中！！

しかしながら、答えは④埼玉県です。義仲は、当時、武蔵国と呼ばれていた、現在の埼玉県に生まれました。ある説では、上野国（現在の群馬県）で生まれたとも伝えられていますが、義仲は埼玉県嵐山町に生まれたという説が有力です。嵐山町の鎌形八幡神社には、義仲が生まれた際の産湯に使ったと伝わる清水が残されています。

義仲の幼名は「駒王丸」といいます。幼名からは、両親の元氣な子供に育ってほしいという温かい想いが込められているものと想像されます。

父は源義賢といつて、清和源氏の由緒ある血筋の武将で、京の都（現在の京都府）で天皇の警護役「帯刀先生」という重要な役職を務めるほどの実力者でした。母は小枝御前と伝わっています。

今回は、京で活躍していた源氏一族が関東地方へ進出することになった背景を紹介します。そして、このことが、駒王丸の運命を変えていくのです…。

問い合わせ 観光振興課

☎(67)1760 内線732

猛将木曾義仲

「俱利伽羅峠に想いを馳せて」

第2回 源氏一族の確執の中で…

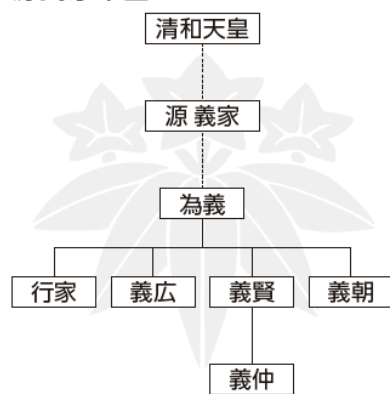
シリーズ2回目は、駒王丸(木曾義仲の幼名)の父源義賢と源氏一族の動向について紹介します。

しかしながら、平安時代末期の源氏一族について分かりやすく説明することもたくさん登場します。今回の歴史の勉強は難しいですが、何度も読み返して、理解してください。

義賢は清和源氏の流れをくむ、源氏の棟梁であった源為義の次男として生まれます。つまり、為義は駒王丸の祖父にあたります。義賢には義朝という兄の他に、義広や行家といった弟などがいました。これら、義賢の兄弟が後の義仲の人生に深く関わりを持つこととなります。

為義は源氏一族の家督争いの中で頭角をあらわし、白河法皇や鳥羽上皇の信頼を得て昇進しますが、自身の失

源氏家系図



義仲・巴の魅力を全国に!
大河ドラマ誘致プロジェクト発動中!!

態と郎党(家臣)の狼藉により官位を失います。

為義の長男源義朝は、幼少期を東国(関東地方)で過ごし、次第に東国の豪族との結びつきを深め、東国武士団を率いる一大勢力を築きます。義朝はやがて京で官位を得て、為義の立場を超える地位に昇進します。

為義は長男の義朝より、次男の義賢を後継者として考えており、南関東で勢力を伸ばし、京で躍進する義朝に対抗するため、義賢を北関東の上野国(現在の群馬県多胡へ)と向かわせます。

東国に赴いた義賢は、武蔵国(現在の埼玉県)で勢力を誇っていた秩父重隆との結びつきを深め、大蔵(現在の埼玉県比企郡嵐山町)の地に館を構えます。

平安末期は、自分の勢力拡大のためには同じ一族、ましてや親兄弟であっても相争うという時代だったのです。次回は駒王丸の幼少期について紹介します。次回もお楽しみに。

問い合わせ 観光振興課

☎(67)1760 内線732

猛将木曾義仲

「俱利伽羅峠に想いを馳せて」

第3回 大蔵館での暮らし

シリーズ3回目は、駒王丸(木曾義仲の幼名)の幼少期について紹介します。

第1回で紹介したとおり、駒王丸は現在の埼玉県嵐山町に生まれたと伝えられています。「嵐山」の地名の由来は、昭和の初め頃、四季を通じて豊かな自然景観が楽しめ、京都の嵐山の景色に似ていることから命名されました。

駒王丸が幼少期を過ごした約860年前、当時は武蔵国と呼ばれていた頃も、今と同じように恵まれた自然環境の中で駒王丸はすくすくと成長したのと思われまふ。後の義仲の人物像の素地は、このような自然環境の中から育まれたものと想像できます。

駒王丸の父源義賢は、上野国多胡庄の豪族秩父重隆の養子であった



義仲・巴の魅力を全国に!
大河ドラマ誘致プロジェクト発動中!!

と「源平盛衰記」に記されており、「大蔵館」に住んでいたと伝わっています。現在の嵐山町の大蔵神社境内に屋敷の中心があったとされており、「大蔵館跡」の看板が建っています。

大蔵館跡から少し離れた鎌形という地区に「伝木曾殿館跡」の看板が建っています。付近には駒王丸が生まれた際に産湯として使ったと伝わる清水の湧き出る「鎌形八幡神社」があることから、駒王丸はこの地で生まれ、義賢の居住する館とは別に、少し離れたところで育ったものと推察できます。

この豊かな自然環境の中で、幼い駒王丸に悲劇の時が訪れます。駒王丸の身に何が起こったのか。次回もお楽しみに。

※「源平盛衰記」の読み方については「せいすいき」との読み方もありますが、このシリーズでは「じょうすいき」と読みさせていただきます。

問い合わせ 観光振興課

☎(67)1760 内線732



大蔵館跡 (埼玉県比企郡嵐山町)

猛将木曾義仲

第4回 大蔵の戦い

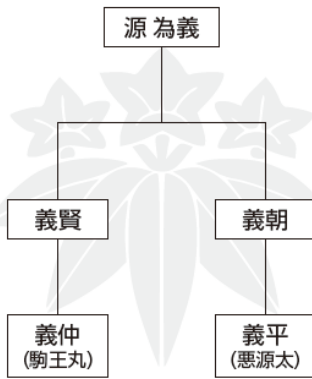
シリーズ4回目は、幼い駒王丸(木曾義仲の幼名)を襲った悲劇について紹介します。

駒王丸の父、源義賢は、上野国の豪族秩父重隆の養子になり、結びつきを深めることにより東国の武士の信頼を得て、勢力を拡大していきます。

同じく、東国武士団を率いる一大勢力を築いていた義賢の兄、源義朝は、義賢の東国進出を恐れます。源氏一族の棟梁は自分であると自負していた義朝は、子の源義平に義賢を討ち取るよう命じます。

久寿2年(1155)8月、突然、義平率いる軍勢が義賢の住んでいた大蔵館を襲撃します。「大蔵の戦い」です。「戦い」とは称されているものの、不意を突かれた義賢は、抵抗する間もなく討ち取られたと伝わっています。

源氏家系図



倶利伽羅峠に想いを馳せて



義仲・巴の魅力を全国に!
大河ドラマ誘致プロジェクト発動中!!

「平家物語」には、このとき、秩父重隆も大蔵館で討ち取られたと記されています。

叔父である義賢を討ち取った義平は、このとき15歳であったと伝わっており、若年ながらに武名をあげたことから、「強い」という意味の「鎌倉源太」と呼称されるようになります。

同じ源氏一族であるのに、勢力拡大のために、兄弟が争い、相手を滅ぼすという惨劇。駒王丸は、従兄弟である源太義平によって、幼くして父を失います。このときの駒王丸の年齢には諸説ありますが、「源平盛衰記」では2歳であったと伝えていきます。

大蔵館が襲われた直後、駒王丸は義平に討ち取られていません。襲撃時には、大蔵館とは別の地に住んでいたために難を逃れることができたと思像できます。

2歳の駒王丸を突然襲った悲劇。次回は、義平の追っ手が駒王丸に忍び寄る緊迫の様子を紹介します。息詰まる展開に乞うご期待ください。

問い合わせ 観光振興課

(67)1760 内線732

猛将木曾義仲

第5回 死地からの脱出

シリーズ5回目は、父を討ち取られた2歳の駒王丸(木曾義仲の幼名)が窮地に陥る様子を紹介していきます。

久寿2年(1155)、駒王丸の父、源義賢は、兄、源義朝の命を受けた源義平(義朝の子)によって大蔵館で討ち取られます。

自分たちの勢力を脅かす存在であった義賢を亡き者にした義平は意気揚々でした。しかし、義平は駒王丸がいないことに気付きます。駒王丸が生きていれば、いつか父殺しの恨みから自分の命が狙われるかもしれないと恐れ、義平は禍根を断つためにも、幼い駒王丸を見つけ出し、必ず殺すよう家来に命じます。

東国の武将、畠山重能は、義賢とともに討ち取られた秩父重隆の甥ですが、同族でありながら勢力争いのために叔父と対立しており、このときは義朝側に与し、大蔵の戦いに加わっていました。



源義賢墓
(埼玉県指定史跡)
埼玉県比企郡嵐山町

重能は、義平の命に従い、搜索の範囲を広げます。そして、ついに、重能は大蔵館から離れたところに潜んでいた義賢の妻、小枝御前と、一緒にい

倶利伽羅峠に想いを馳せて



義仲・巴の魅力を全国に!
大河ドラマ誘致プロジェクト発動中!!

た駒王丸を見つけ出します。

絶対絶命。まさに駒王丸はこの時、殺される運命にありました。重能は義平の命令どおり、駒王丸を殺そうとしますが、2歳の幼子を見て、情け深い重能は手を下すことができませんでした。

しかしながら、そのまま駒王丸を見逃せば、自分が義平から非を問われることになるため、悩んだ重能は、自分の信頼する同僚の斎藤実盛に相談します。当時、武蔵国長井庄(現在の埼玉県熊谷市)を領していた実盛は、同僚の相談にのります。実盛は以前、義賢とも親交があり、その遺児駒王丸を見て、殺すのは忍びなく思い、助けてやろうと決意します。

畠山重能と斎藤実盛に命を救われた駒王丸。しかし、義平の家来達は駒王丸の生死を確認するため、探索を続けます。

次回は、義平の追っ手から逃れ、武蔵国を落ち延びる駒王丸の様子を紹介していきます。

問い合わせ 観光振興課

(67)1760 内線732

猛将 木曾義仲

倶利伽羅峠に想いを馳せて

第6回 木曾へ①

シリーズ6回目は、駒王丸(木曾義仲の幼名)が木曾へ落ち延びる様子を紹介します。

どのようなルートで木曾へ向かったのか、詳細な史料がないため、今回は小説風(フィクション)にて紹介させていただきますので、ご了承ください。

斎藤実盛は、小枝御前に落ち延びる手筈を伝えた後、館から立ち去った。

実盛を見送った小枝御前は駒王丸を小書院に呼び寄せ、静かに、しかし毅然とした声で語りかけた。

「駒王丸、よくお聞きなさい。あなたのお父上が義平殿に討ちとられました。」

幼い駒王丸にも、父義賢がこの世にいないことは理解できた。あの大きな体、ごつごつとした太い手、背中に残る刀傷。あの優しい眼差しに、もう触れることができない悲しみが駒王丸の身を震わせた。

「この大蔵の地には危険です。しかし、逃れようにも母は非力です。そこで、斎藤実盛殿を頼ることにいたしました。私たちは信濃国(現在の長野県)の木曾へ逃れます。」



義仲・巴の魅力を全国に!
大河ドラマ誘致プロジェクト発動中!!

駒王丸はまだ見ぬ地への不安と期待をこめて、そう呟いた。

翌日、小枝御前からは目立たぬような旅支度を調べ、慌ただしく館を出立した。それは長い旅の始まりであった。

実盛の配下の者数名と小枝御前、駒王丸、そして侍女のわずかな人数での旅路となった。

一行は人目を避け、できるだけ山道を選んで木曾を目指した。高低差もあり、歩きにくい山道を、小枝御前は気丈にも弱音をはずさず、歩き続けた。歩き続けることで夫義賢を失ったつらさを忘れようとでもしているかのようでもあった。

2歳の駒王丸の歩みでは義平の手勢に追いつかれるため、実盛配下の者が駒王丸を背負い、いくつもの峠を越えていく...

次回も引き続き、木曾へと落ち延びる駒王丸の様子を紹介します。お楽しみに。

問い合わせ 観光振興課

(67) 1760 内線732

猛将 木曾義仲

倶利伽羅峠に想いを馳せて

第7回 木曾へ②

シリーズ7回目は、駒王丸(木曾義仲の幼名)が信濃国(現在の長野県)の木曾へ落ち延び、中原兼遠に匿われる様子を紹介します。今回も小説風(フィクション)にて紹介させていただきますので、ご了承ください。

駒王丸と母小枝御前は、斎藤実盛の配下に守られながら、ひたすらに木曾を目指した。時には、義平の手勢と思われる武士団が現れ、木陰に隠れてやりすごすなど、ひやっとする瞬間もあった。東国の風土しか知らなかった駒王丸にとって、道中で目にする動植物やのどかな風景は珍しく、小枝御前らの緊張感にはお構いなしに、旅を楽しんでいた。

どれだけの峠道を越えたことだろうか。2歳の駒王丸が数えることのできない日数がたつた頃、一行はようやく実盛が導いてくれた中原兼遠の領する信濃国の国境にたどり着いた。

兼遠の家来の者たちが国境の峠まで出向き、駒王丸一行を出



山に囲まれた木曾谷の風景(長野県木曾郡木曾町)



義仲・巴の魅力を全国に!
大河ドラマ誘致プロジェクト発動中!!

迎え、兼遠の屋敷へと案内してくれた。小枝御前は駒王丸を抱えて、屋敷の門をくぐった。そこには、堂々たる偉丈夫の中原兼遠が立っていた。

「おお、小枝御前殿。よくぞご無事であった。こたびのこと、さぞかしつらかったであろう。しかし、我が屋敷に來られたからには安心してくだされ。この兼遠がお守り申す。」

信濃を統べる豪族兼遠は、力強く、しかしながら優しい声で小枝御前に語りかけた。

「か弱き女と幼子、この戦の世で何の役にもたちませぬが、ぜひ、お頼み申します。」

「何を言われるか。この和子こそは源氏の由緒ある血筋をひく義賢殿の御曹司。お迎えするのは、我ら信濃衆にとつてもたいへんな栄誉ですぞ。さあ、さあ、まずは長旅の疲れを癒やしてくだされ。」

そう言って、兼遠は駒王丸一行を屋敷の奥へと招き入れた。駒王丸は屋敷を案内する兼遠の背中を見て、父義賢の面影を見ていた。

次回もお楽しみに。

問い合わせ 観光振興課

(67) 1760 内線732

猛将 木曾義仲

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中！！

倶利伽羅峠に想いを馳せて

第8回 源氏の御曹司

駒王丸が木曾へたどり着いた翌日、中原兼遠の屋敷には、兼遠の主だった家臣達が集まり、広間につめていた。

あらかじめ事情は説明されていたものの、いざ、源氏の由緒ある御曹司が木曾に落ち延びてきたことから、座はどことなくざわついていた。そこに、兼遠が駒王丸を引き連れ、現れた。

広間は一瞬にして静かになった。

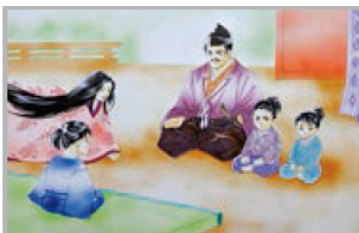
兼遠のすすめに従い、駒王丸は上座に着座した。兼遠は下段の家臣らの前に座った。

駒王丸は家臣らの視線が自分に向けられていることに緊張したが、兼遠のほうをちらっと見ると、兼遠が軽くなづいたのを合図に、幼い声ながら、はつきりと、澄んだ声で、

「皆々様方にはよろしくお頼み申します。」と述べ、頭を垂れた。

その凜とした表情に、兼遠をはじめ、家臣ら一同は心をうたれた。つい先日、実の父を討ち取られたというのに、なんと気丈なことか。普通なら

恐怖に泣き叫び、手に負えないものだが、やはり、源氏の由緒ある血筋をひく和子であることよ、と兼遠は駒王丸を見守った。



「次郎、四郎、こちらへ」

兼遠が声をかけると、家臣団の後ろに控えていた2人の男の子が、駒王丸の前に着座した。二人とも、力強い目をしていて、どことなくあどけなさも感じられた。

「駒王丸殿、こちらに控えし2人は我が息子にごさる。次郎と四郎、いづれもやんちゃな息子であるが、これからは兄弟と思い、家族同様に、心安らかに暮らしてくださいませ。」

「次郎にごさいます。私は駒王丸様より年長ですから、兄のように思うてくだされ。」

続いて四郎が挨拶をした。

「わしは四郎じゃ。駒王丸様、よろしく。」

「こら、四郎、きちんと挨拶がでんのか。馬鹿もの。」

「うへー。だって、家族同様にと云ったのは父上ではありませんか。」

「うーん、まあ、そのだなあ……」

家臣団の中から苦笑が起った。その雰囲気は和んだのか、駒王丸が次郎・四郎に向かって笑顔で

「駒王丸でございます。これからお世話になります。」と挨拶した。

久しぶりのほほえましい様子に、夫義賢が亡くなったあと、必死で駒王丸を守ってきた小枝御前の目には涙がうかんでいた。

次回もお楽しみに。

問い合わせ 観光振興課

☎(67)1760 内線732

猛将 木曾義仲

倶利伽羅峠に想いを馳せて

第9回 駒王丸の選択

駒王丸が逃れてきた木曾谷は、江戸時代には五街道のひとつ「中山道」が南北に走り、街道沿いには随所に宿場町が設けられるなど、人の往来のたいへん多い街道筋にあった。

しかしながら、この連載の主人公である駒王丸が生きた平安時代末期の木曾谷は、人の往来も少なく、山林に囲まれ、木曾川が静かに流れる、まさに「人里離れた」と言っても過言ではない土地であった。それゆえ、斎藤盛は、木曾は要害の地であり、源氏の御曹司を匿うにふさわしい場所であると判断し、信濃国権守である中原兼遠に駒王丸を託したものと考えられる。

この豊かな自然環境の中で、駒王丸は、中原兼遠の庇護のもと、母小枝御前とともに穏やかに暮らしていた。

現在の長野県木曾郡木曾町には、中原兼遠の屋敷跡



中原兼遠屋敷跡(長野県木曾郡木曾町)



義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト発動中！！

今回は、駒王丸が成長したと伝わる、もうひとつの場所についてご紹介します。次回もお楽しみに。

問い合わせ 観光振興課

☎(67)1760 内線732

猛将 木曾義仲

倶利伽羅峠に想いを馳せて

第10回 駒王丸 松本成長説

前回まで、駒王丸は現在の長野県木曾郡木曾町に落ち延び、木曾町日義にある中原兼遠の屋敷で成長したと紹介してきました。

ここに、もう一つの説があります。駒王丸は木曾町ではなく、長野県松本市で成長したという説です。

江戸時代末期から明治時代初期に活躍した漢学者・歴史家で、日本初の文学博士として知られる重野安繹博士(1827~1910)が、明治27年9月に旧制松本中学現在の松本深志高校で「木曾義仲は松本で成長した」と講演しました。

「義仲を匿った中原兼遠は信濃国の権守であったため、信濃国府のあった松本で信濃国中の政務を執っていたはずであり、義仲も中原兼遠のいた松本、今井四郎兼平(兼遠の息子)の居住する今井村、樋口次郎兼光(兼遠の息子)が居住する樋口村の間で、26~27



義仲・巴の魅力を全国に！大河ドラマ誘致プロジェクト発動中!!

歳の頃まで成長した(松本・義仲復権の会発行「木曾義仲と松本平」から抜粋)。」というのが講演の要旨です。

松本市には、信濃国府があったと推定される場所があるとともに、義仲の子孫にゆかりの史跡もあり、現在、「松本・義仲復権の会」が重野博士の義仲松本成長説をもとに、義仲の顕彰活動に努めています。

また、長野県東筑摩郡朝日村の光輪寺付近は、古くは「木曾部桂入」と呼ばれていた地域で、義仲が住んでいたとも伝わっています。

駒王丸がどこで育ったのかについては、史料が乏しいため、明確ではなく、木曾町や松本市など、いろいろな説がありますが、どこで駒王丸が成長したのかに想いを巡らせるのも歴史ロマンの醍醐味だと思われまふ。

次回は、駒王丸が勉学に励むとともに、武技を磨き、たくましく成長していく様子を紹介します。お楽しみに。

問い合わせ 観光振興課

(67)1760 内線732

猛将 木曾義仲

倶利伽羅峠に想いを馳せて

第11回 駒王丸、武技を磨き、勉学に励む

駒王丸が落ち延びた信濃国の木曾(長野県木曾郡木曾町日義)は、谷深く、山林に囲まれた地であった。江戸時代後期の文化11年(1814)に発刊された「木曾路名所図會」には、当時の木曾の風景が描かれており、駒王丸が幼少期を過ごした平安時代末も、木曾が山林に囲まれた地であったことがうかがえる。

中原兼遠は、将来、駒王丸が源氏の大將となるべく養育することを決意し、駒王丸に武技を磨かせ、勉学に励ませた。その意味では、木曾は駒王丸の養育には適した地であった。駒王丸は山に登り、川で泳ぎ、野原を駆け回



「木曾路名所図會」山中温泉「芭蕉の館」俳文学研究友の会所蔵

るなど、豊かな自然環境の中で、体力をつけ、すくすくと成長していった。

木曾周辺は、駒ヶ岳や御嶽山などの急峻な山がそびえ立ち、その麓の木曾駒高原や開田高原は豊かな牧草地が広がっていることから、駒(馬)の飼育に適しており、多くの良馬が産出された。駒王丸も成長するに従い、乗馬を習い、広い高原を駆け回り、優れた馬術を培ったことがうかがえる。

兼遠は、ことに駒王丸の学問奨励について熱心であった。現在の木曾町新開に建つ「手習神社」は、兼遠が、駒王丸のために、学問の神として勧請したと伝わっている。兼遠は信濃国の権守であったことから、当時の最先端の情報を京から取り寄せることができたものと考えられ、駒王丸は山奥にいな

がらも、豊富な知識を蓄えることができたことが想像できる。

このように、駒王丸は兼遠の期待に応え、武技を磨くとともに、勉学に励み、すくすくと成長していった。

問い合わせ 観光振興課

(67)1760 内線732

義仲・巴の魅力を全国に！大河ドラマ誘致プロジェクト発動中!!



猛将木曾義仲

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中！！

俱利伽羅峠に想いを馳せてー

第12回 巴との出会い

駒王丸が成長し、後に「木曾冠者次郎 源義仲」を名乗るようになるが、義仲には常に「巴」という女武者がそばにいて、生涯をともにしたと伝わっている。

しかしながら、巴がいつ、どこで生まれ、誰の娘なのか、明確な史料(家系図)がないため、その存在自体が疑問視されている。巴については、「平家物語」や「源平盛衰記」の義仲が討ち死にする場面において記述があるだけで、その姿はようとして知れない。

「源平盛衰記」では、義仲が討ち死にする際、巴は28歳であったとの記述がある。通説では義仲は31歳で討ち死にしたとされていることから、巴は、駒王丸が信濃国(現在の長野県)に逃れてきてから、生まれたものと考えられる。

また、「源平盛衰記」には、巴は、駒王丸を庇護した中原兼遠の娘と記述されている。つまり、巴は樋口次郎兼光、今井四郎兼平の妹にあたり、駒王丸は兼光や兼平と遊び仲間であったことから、巴とも幼い頃から、ともに遊んでいたことがうかがえる。

長野県木曾郡木曾町を流れる木曾川沿いに、「巴淵」という景勝地がある。ここには巴にまつわる伝説が残され



ている。この淵では川の流れが巴状に渦巻くことから、その名前がつけられたと伝わる。伝説には、この淵に住む龍神が化身して、中原兼遠の娘「巴」として姿を変え、生まれたと伝わっている。後に女武者として武勇をばせ、義仲を守護したことは、この龍神伝説につながるものと考えられる。

また、巴は幼い頃にこの淵で水浴をしたり、成長してからは女武者として武技を養うために水練を行ったとも伝わっている。

木曾町をはじめ、全国には巴にまつわる伝説が多いことから、小矢部市では、義仲・巴ゆかりの地と連携して、巴が実在したことを証明するため、史料収集・調査に努めている。

連載「猛将木曾義仲」次回もお楽しみに。

問い合わせ

観光振興課

☎(67)1760

内線732



巴淵(長野県木曾郡木曾町日義)

猛将木曾義仲

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中！！

俱利伽羅峠に想いを馳せてー

第13回 武家政治の兆し「保元の乱①」

久寿2年(1155)に駒王丸の父 源義賢が、源義朝(駒王丸の叔父・義平親子に討ち取られた翌年、時代の転換となる一大事件が起こります。「保元の乱」です。

この事件については、一言で言えば権力争いなのですが、天皇家や藤原摂関家、武家が複雑にからみあった武力衝突で、理解するのはたいへん難しいです。

できるだけ、分かりやすく解説しますが、何度も読み返して、理解してください。

平安時代末期、天皇を退いた上皇が政治の実権を握る「院政」という政治形態が行われていました。

1141年、鳥羽上皇は上皇を退き法皇となり、子の崇徳天皇を退位させ



「国史略」(個人蔵)

て崇徳上皇とします。

このとき、近衛天皇が天皇の座を譲られますが、若死にしましたため、崇徳上皇の弟が天皇の座につき、後白河天皇となります。

崇徳上皇は自分の子(重仁親王)が天皇の座につくものと考えていたのですが、自分の弟(後白河天皇)が天皇の座につき、天皇自ら政治を行う「親政」を進めようとしたことから、崇徳上皇は院政を行える可能性がなくなり、期待を裏切られた形となりました。このことから、崇徳上皇は後白河天皇をうらむことになりました。

その頃、朝廷内では藤原頼長が弟の忠通と権力争いを繰り広げていました。

1156年、鳥羽法皇が崩御すると、政治のバランスが崩れ、天皇家や摂関家、源氏や平氏を代表とする武家の確執が一気に表面化し、それぞれの親兄弟が骨肉の争いを繰り広げる事態に進展してしまいます。

貴族社会から武家社会へと移行する、日本の歴史上、たいへん重要な出来事である「保元の乱」。

今回は「保元の乱」の勝者が誰なのかを紹介します。お楽しみに。

問い合わせ 観光振興課

☎(67)1760 内線732



猛将 木曾義仲

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中！！

倶利伽羅峠に想いを馳せて！

第14回 武家政治の幕開け「保元の乱②」

1156年、鳥羽法皇が崩御し、年号が「保元」へと変わります。法皇の崩御をきっかけに、政治バランスが不安定となり、皇族・貴族・武家それぞれが派閥を組み、親兄弟が敵味方に分かれての激しい争いが繰り広げられます。

対立の図式は、大まかに次のとおりです。
※太子が勝者

・皇族 後白河天皇×崇徳上皇
(後白河天皇の兄)

・貴族 藤原忠通×藤原頼長(忠通の兄)

・平家 平清盛×平忠正(清盛の叔父)

・源氏 源義朝×源為義(義朝の父、
駒王丸の祖父)

この争いにおいて、後白河天皇が争いを制します。崇徳上皇は失脚し、讃岐国へ配流(島流し)となり、恨みを抱



出陣する武士

きながら亡くなります。

源氏方では源氏一族を取りまとめていた源為義が敗者となり、斬首されます。このとき、勝者となった源義朝は父為義の助命を願い出ますが、許されず、涙をのんで父を処罰したと伝えられています。

この争乱は「保元の乱」と呼ばれ、武士が武力をもって政治に介入するきっかけとなり、後に「武家政権」が誕生する契機にもなりました。

保元の乱において、平清盛と源義朝は大活躍したのですが、争乱後の論功行賞では源氏より平家が優遇され、義朝は次第に平家に対して不満を抱くようになります。

争乱後、朝廷内では新たな権力闘争が始まります。信西(藤原通憲)と藤原頼朝が政治の主導権を握るため、信西は清盛を、信頼は義朝を抱き込み、互いに武力をもって威嚇し合うようになります。

そして、ついに、保元の乱から3年後、再び争乱が勃発します。「平治の乱」です。

「平治の乱」によって、皇族・朝廷・武家の勢力構図がどのように変わったのか、次回をお楽しみに。

問い合わせ 観光振興課

☎(67)1760 内線732

猛将 木曾義仲

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中！！

倶利伽羅峠に想いを馳せて！

第15回 武家政治の幕開け「平治の乱」

保元の乱後、一時の平穏を取り戻したにもかかわらず、朝廷内で新たな権力闘争が始まります。政治の主導権を握るため、信西(藤原通憲)と藤原信頼がそれぞれ派閥をつくり、武士を味方につけて対立を深めていきます。

源氏の棟梁である源義朝は、保元の乱において武功をあげたにも関わらず、論功行賞で信西が平清盛を厚遇したことに憤りを感じ、次第に藤原信頼に近づきます。

平治元年(1159)、信頼ら反信西派は、清盛が熊野詣に出かけた隙をねらって、兵を挙げ、後白河上皇と二条天皇を幽閉するとともに、信西を処刑します。しかし、この襲撃を察知した平清盛は、すぐさま京へ引き返し、信頼・義朝らを撃ち破ります。

対立の図式は、大まかに次のとおりです。

【勝者】

藤原通憲(信西)、平清盛

【敗者】

藤原信頼、源義朝

源義平(義朝の子)

源頼朝(義朝の子、駒王丸の従兄弟)

義朝は頼朝らを引き連れて京を脱出し、自分の支配地である東国を目指します。しかしながら、途中、頼朝は平家方に捕まり、後に伊豆(現在の神奈川県)に流罪となります。義朝は自分の家臣に助けを乞いますが、入浴中に裏切りにあい、あえなく討ち取られてしまいます。

この争いにおいて、平清盛の勢力が強まり、やがて政治の実権を握るようになります。そして、天皇家に接近した清盛の手腕により、平家一門はますます繁栄していくことになります。

逆に、源氏は、義朝が討ち取られたため、人目を忍ぶような状態となり、源氏に仕えていた武士たちが平家に鞍替えして、平家の権威はますます強まります。

木曾でひっそりと暮らしていた駒王丸にとって、一見、関係のないように思われる保元・平治の乱。しかし、この2つの内乱が、後の駒王丸の生き様に大きな影響を与えます。父の仇である義朝・義平が平家に討ち取られたことにより、駒王丸は追っ手の目を気にせず、心安らかに暮らすことができようになります。

そのような世情を知ってか知らずか、幼い駒王丸は木曾の地でたくましく成長していきます。

今回は駒王丸の元服の様子を紹介いたします。お楽しみに。

問い合わせ 観光振興課

☎(67)1760 内線732

猛将 木曾義仲

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ「義経」プロジェクト
発動中！！

倶利伽羅峠に想いを馳せてー

第15回 元服

「保元の乱」「平治の乱」という、京の都の争乱の影響を直接受けずに、駒王丸は木曾の地ですくすくと成長していた。

木曾義仲の生涯を記した「義仲勲功図繪」には、養父 中原兼遠が駒王丸に「射術(弓で矢を射る技術)を教え、剣法(太刀を使う剣術)を伝え」とあり、駒王丸は幼くして「一を聞いて十を知る」ほどに理解力に優れ、「諸芸に熟し、太刀打早業諸人の目を驚かす」ぐらいに武技に秀でていたと記されている。

幼なじみの次郎(兼光)や四郎(兼平)、そして巴とともに木曾の山野を駆け回り、たくましく成長して13歳になった駒王丸は、ある日、兼遠の屋敷の小書院に呼ばれた。

「駒王丸殿。そなたは13歳になり申した。月日の流れの早いことよ。」

「はい。兼遠殿のおかげで、穏やかに暮らしていることをかたじけなく存じます。」

「うむ、武家にとって13歳といえ、一人前になったと同じじゃ。ついでには、わしが烏帽子親となり、駒王丸殿の元



石清水八幡宮

服の儀をあげたいと思うておる。」

駒王丸は感激のあまり、

「ありがたき幸せに存じます。」と、兼遠に向かって深々と頭を下げた。

「平家物語」では、駒王丸が元服したのは仁安元年(1166)のこととされている。元服は、源氏が代々、武運長久を願った石清水八幡宮 現在の京都府八幡市で執り行われることに決まった。

厳肅な雰囲気の中で元服の儀が執り行われ、髻を取り上げ、烏帽子をかぶせられた駒王丸は、以後、「木曾冠者次郎 源義仲」を名乗るようになる。

元服の様子を聞いた駒王丸の母小枝御前は、大いに感激し、息子の成長を喜ぶとともに、兼遠への心遣いに深く感謝したのであった。

駒王丸が元服した時期、世の中は平家一門が栄華を極めていた最中であり、八幡宮への道中、駒王丸は平家の繁栄ぶりを目の当たりにしたことであろう。

後に、平家と刃を交えることになるとは、元服したばかりの13歳の義仲には知る由もなかった。

今回は奢れる平家の様子を紹介し、お楽しみに。

問い合わせ 観光振興課

☎(67)1760 内線732

猛将 木曾義仲

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ「義経」プロジェクト
発動中！！

倶利伽羅峠に想いを馳せてー

第17回 驕れる平家

駒王丸が元服し、木曾義仲を名乗り始めた頃、世の中は平家一門が栄華を極めていました。

平治の乱後、天皇家との結びつきを強めた平 清盛は異例の出世を果たし、仁安二年(1167)には当時の政治の主導権を握る従一位太政大臣の位にのぼりつめます。清盛の他にも子孫や兄弟が出世し、平家が官位を独占する状態になります。

しかしながら、その背景には、一族の繁栄のみを追求することで、庶民の生活を顧みないばかりか、天皇家に対しても横暴な態度をとるような姿勢がうかがえます。

やがて、平家一門の中で「平家にあらずんば人にあらず」と発言する者がでてきます。清盛の義弟 平 時忠が発言したと伝わっていますが、この言葉には、まさに驕れる平家の様子が象徴されているように思われます。

このようなことから、一般的に、平家一門の代表格である平清盛は「悪



「平清盛公日招像」広島県呉市

者」に見られがちではありませんが、その反面、宋(当時の中国)との交易を活発にし、国内の経済の発展に努めた、先見の

明がある人物であったとされています。交易のために湊の整備に積極的に取り組みますが、現在の兵庫県神戸市は清盛が貿易港として築き、発展した土地として知られています。

また、厳島神社(広島県廿日市市宮島)の社殿の造営や、平家納経を奉納するなど、信心深い面もあったと伝わっています。

ここにひとつの逸話が残っています。現在、「音戸の瀬戸」(広島県呉市)と呼ばれる海峡は、もともと陸続きでしたが、清盛が海上交通の利便性の向上を図るため、土地を掘削し、海峡にしようと計画します。しかし、工事はなかなか進まず、なんとか早く工事を終わらせようとして、清盛が夕日に向かって扇をふり、太陽を呼び戻し、日が暮れるのを遅らせ、そのおかげで海峡が完成したと伝わっています。あくまで伝説ですが、ここから平家の富裕な財力と強大な権力のほどをうかがい知ることができます。

この驕れる平家に対して不満を抱く者たちが登場し、清盛を排除しようします。「鹿ヶ谷の陰謀」です。

この陰謀の首謀者が、後に小矢部市に関わりを持つことになるのです。次回もお楽しみに。

問い合わせ 観光振興課

☎(67)1760 内線732

猛将 木曾義仲

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中！！

倶利伽羅峠に想いを馳せてー

第18回 鹿ヶ谷の陰謀

平家の繁栄に対して民衆は反感を抱き、平家の悪口を言うようになります。平家はそれらを取り締まるため、赤衣着物におかっぱ頭をした「禿髪」とよばれる少年を京の都に放ち、悪口を言う者を見つけては捕らえ、処罰します。

平家一門が繁栄を極めるに伴い、平・清盛と後白河法皇との間に亀裂が生じます。清盛の妻・時子の妹である建春門院(滋子)は、後白河法皇の妻で、平家とのパイプ役を担っていました。その建春門院が亡くなったことにより、良好なバランスが一気に崩れてしまいます。

後白河法皇は、自分の政治権力の低下を危ぶみ、平家打倒を密かに計画するように促します。法皇は、側近の藤原成親、西光法師、俊寛僧都、平康頼らを俊寛の別荘のある鹿ヶ谷に集

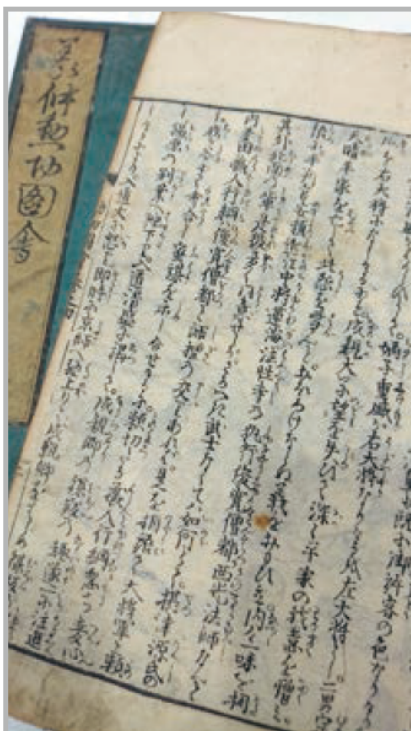
め、平家打倒の謀をめぐらします。

安元三年(1177)、平家打倒の間である多田蔵人行綱は、平家を倒すことは不可能だと悟り、清盛に計画をばらしてしまいます。

激怒した清盛は、藤原成親をはじめ、西光らを捕らえます。西光は、清盛に向かって「成り上がり者」などと暴言をはき、清盛の怒りを買って、斬首されます。

この出来事は「鹿ヶ谷事件」ともよばれ、別荘を所有していた俊寛も捕まり、「平家物語」では鬼界ヶ島(鹿児島県)に配流となったと記されています。が、なんと、小矢部市には俊寛が小矢部市の宮島地区に配流になったとの伝説が残されています。

今回は小矢部市に伝わる俊寛伝説やゆかりの史跡等を紹介いたします。お楽しみに。



鹿ヶ谷事件の記述がある
「義仲勤王図繪」

問い合わせ

観光振興課

☎(67)1760

内線732

猛将 木曾義仲

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中！！

倶利伽羅峠に想いを馳せてー

第19回 小矢部市に残る俊寛伝説

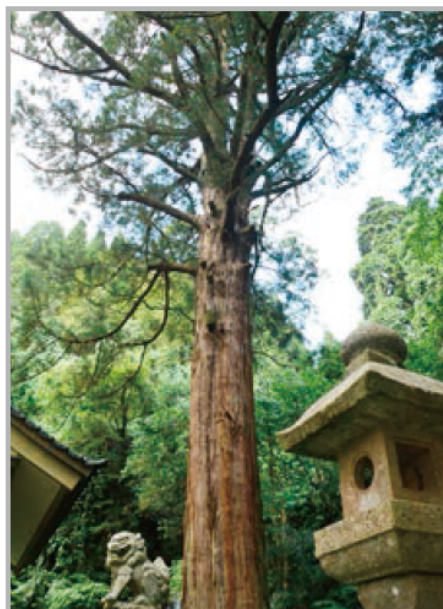
平家打倒を企てた「鹿ヶ谷の陰謀」の一味である俊寛僧都は、「平家物語」によると鬼界ヶ島(鹿児島県)に配流となったと記されていますが、小矢部市の宮島地区には俊寛にまつわる伝説が多く残されています。俊寛の配流先は小矢部市だったのでしょうか？

別所滝に鎮座する滝之社境内には「俊寛杉」があります。俊寛が境内奥にある観音滝に打たれ、罪が許されて早く京の都に戻るよう祈りながら杉の簀を地面にさしたものが根をはり、大木になったと伝えられています。この大杉は「宮島の大杉」として市の文化財(天然記念物)に指定されています。滝之社境内の観音堂には、俊寛と同じく配流となった平康頼の守り本尊である観音が祀られています。熊野権現を信仰していた康頼が、

観音滝を那智滝(和歌山県)になぞらえ、滝に打たれながら罪が許されるのを祈っていたと伝わっています。

久利須にある林間休養施設「恵林館」の近くには、俊寛の屋敷があったと伝わる場所があります。「俊寛塚」が建立されており、人里離れた地でひっそりと過ごした俊寛が偲べれます。また、久利須には俊寛の妻子にまつわる「比丘尼塚」「姫塚」があります。配流となった俊寛の身を案じ、妻子が訪ねてきたと伝わり、俊寛が妻子を迎えたと伝わる場所には、現在「出合橋」と名付けられた橋がかかっています。

これら俊寛伝説は、小矢部市の観光・歴史を学ぶ冊子「ふるさとガイドおやべ」に詳しく紹介されています。ぜひ、図書館でご覧ください。



「俊寛杉」 滝之社(小矢部市別所滝)

問い合わせ

観光振興課

☎(67)1760

内線732

結局、俊寛は罪が許されず、宮島地区で亡くなったと伝わっています。俊寛伝説の残る宮島地区。今から800年以上も前に平家打倒を目指した僧侶の悲哀が感じられます。

猛将木曾義仲

倶利伽羅峠に想いを馳せてー

第20回 反平家の兆し

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中！！



治承二年（1178）後白河法皇の皇子である高倉天皇の后、徳子（平清盛の娘）が、後の安徳天皇となる皇子を出産したことで、平家一門の繁栄は絶頂を極めます。

しかしながら、鹿ヶ谷事件以降、清盛と後白河法皇との間には亀裂が生じていました。清盛の子である平重盛は、清盛と法皇との和解に心を砕きます。そのような中、治承三年（1179）清盛と法皇の仲介役を担っていた重盛が突然の病で亡くなります。

重盛の死後、法皇が重盛の所領を没収したことに端を発し、清盛と法皇の対立は激化します。清盛は法皇の態度に怒り、朝廷内の法皇方の側近を解任させるとともに、法皇の御所を兵が取り囲み、法皇を御所から連れ出し、幽閉してしまいます。

さらに、治承4年（1180）清盛は高倉天皇を退位させ、3歳になったばかりの高倉天皇の子を安徳天皇として即位させます。これは明らかに清盛の権勢のなせる業でした。

このような平家の横暴に対して、世間では平家一門のみが繁栄していることに反感を抱き、平家打倒の動きが生れます。その中心となった人物が後白河法皇の第三皇子の以仁王です。

この以仁王の反平家の動きが、後に義仲の運命を大きく変えることになります。

今回は、義仲が再び世の中に登場するきっかけとなった「以仁王の令旨」について紹介します。

問い合わせ 観光振興課

☎(67)1760 内線732

重盛（左）と清盛（義仲勲功図繪）



猛将木曾義仲

倶利伽羅峠に想いを馳せてー

第21回 以仁王の令旨

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中！！



平家一門が繁栄を極める中、平治の乱において平清盛に味方した源氏方の武将、源頼政は、清盛から信頼され、従三位という高い位を授かります。

しかしながら、頼政は平家の横暴を目の当たりにして、このままでは世の中が乱れることを危惧し、平家打倒を企てます。一説には、頼政の子、源仲綱の馬を清盛の子、平宗盛が所望して、対立したことが原因とも伝えられています。

後白河法皇の第三皇子の以仁王は、安徳天皇が清盛の権勢によって即位したこと、自ら天皇となる道を絶たれ、清盛のことを快く思っていないと断言した。頼政は、以仁王に平家の

横暴を訴え、平家打倒を促します。

治承4年（1180）以仁王は、平治の乱で平家に敗れた全国に散らばる源氏一族に対して、平家を打倒する旨の令旨（皇子が出す命令書）を諸国に届けさせます。この令旨は伊豆に配流となっていた源頼朝（木曾義仲の従兄弟）などに届けられるとともに、信濃国にいた、当時27歳の木曾義仲のもとにも届けられます。

しかしながら、この謀は清盛の知るところとなり、首謀者である以仁王のもとへ平家の軍勢が押し寄せます。以仁王の家臣、長谷部信連は、以仁王に女性の衣装を着せて屋敷を脱出させ、自らは平家の軍勢と戦い、捕まってしまう。清盛に武勇を讃えられた信連は死罪を免じられ、一説には能登国（現在の石川県）に配流となったと伝えられています。現在、石川県穴水町に信連ゆかりの地が残されています。

この信連の活躍により、以仁王は脱出し、園城寺（滋賀県大津市）に逃れますが、ここにも平家の軍勢が押し寄せてきます。

今回は、義仲が令旨を授かる様子を紹介します。お楽しみに。

問い合わせ 観光振興課

☎(67)1760 内線732

源仲綱が自分の馬を平宗盛に侮辱され憤る図（義仲勲功図會）



猛将 木曾義仲

俱利伽羅峠に想いを馳せてー

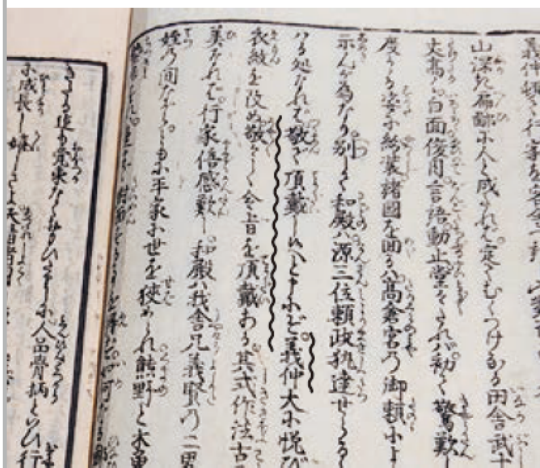
第22回 兄 仲家の死

この連載を読まれている皆さんは、木曾義仲に兄がいたことをご存知でしょうか。

以仁王が平家打倒の令旨を全国の源氏に届けさせていることが発覚し、平清盛は以仁王を捕らえようと軍勢を差し向けます。以仁王は宇治平等院へ逃れますが、平家の軍勢に追いつかれ、奈良へ向かう途中、討ち死にしています。

以仁王に挙兵を促した源頼政も、平等院において平家の軍勢を迎え撃ちますが、平家の大軍には敵わず、頼政も討ち死にしています。このとき、源仲家という武者が頼政とともに討ち死にしたと伝えられています。この仲家こそが、義仲の異母兄だったのです。

仲家と義仲の父源義賢が東国(関東)で討ち取られた際、仲家は何らかの理由で頼政に預け



義仲勲功図會

義仲、巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中!!



られ、養子になつていたのです。生前、義仲と仲家が会つていたかどうかは、史料がなく、はっきり分かりませんが、義仲はこの宇治平等院での戦いにおいて、兄を失つたのです。

仲家の討ち死に前後して、木曾にいた義仲のもとに、以仁王の令旨がもたらされます。令旨を携えてきたのは、義仲の叔父 源行家(義賢の末弟)でした。

「義仲殿、心して令旨を受け取られよ。」
山伏姿の行家から差し出された令旨を恭しく受領した義仲は、「平家を討て」と記された令旨の前身に心臓が高鳴るのを覚えました。

「ありがたいことでございます。ただ、自分には、ともに戦つてくれる軍勢がおらず、非力であります。ここはしばらく考えさせていただきます。存じます。」

義仲はすぐには返答をせず、行家の労をねぎらい、手厚く歓待します。

次回は、義仲が挙兵を決意する様子を紹介いたします。お楽しみに。

問い合わせ

観光振興課 ☎(67)1760 内線732

番組放送のお知らせ

木曾義仲をテーマにした番組が放送されます。小矢部市にゆかりの深い木曾義仲の生涯を、ぜひ番組でご覧ください。

放送日 2月21日(木) 午後8時～9時予定
番組名 NHKBSプレミアム
「英雄たちの選択」

猛将 木曾義仲

俱利伽羅峠に想いを馳せてー

第23回 平家打倒の決意

叔父 源行家から平家追討の令旨を授かった木曾義仲。

今回は、義仲が挙兵を決意する様子を小説風(フィクション)にて紹介させていただきます。

源行家は、義仲の館で歓待を受けた翌日、次なる源氏一族に挙兵を促すため、旅立つて行った。

令旨のことは中原兼遠の息子たち、樋口次郎兼光、今井四郎兼平らにも伝わっていた。

大広間で義仲が令旨を前に腕組みしながら思案しているところへ、兼光と兼平が現れた。

「おお、次郎、四郎。実は相談がある。」
「義仲殿、以仁王様の令旨のことか。」
兄貴肌の兼光が、義仲の心中を察して尋ねた。

「うむ。そのことで悩んでおる。都での平家の横暴は、信濃国にまで聞こえている。我らは平家の悪逆非道を絶ち、庶民の暮らしを守りたいと幼き頃から語り合ってきた。源氏一族は大義名



義仲、巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中!!



分を得て、挙兵を決意するであろう。しかし、わしには味方がおらぬ。」

「兵がおれば、殿は挙兵するのか。」
兼光が義仲の目を見据えて尋ねた。その視線を義仲はまっすぐ受け止めた。

「皆の存念を申せ。」
「しからば、殿。今こそ平家を討つ好機である。殿が源氏の大將となつて都に攻め上り、平家を打ち倒し、混沌とした世を治めたまえ。」

兼光がにじり寄り、拳を床につき、静かに言った。
続いて、兼平も両拳を床に押しつけ、義仲を見上げて力強く言った。

「我ら、幼き頃から殿のそばにおる者どもは、皆、殿のお味方である。我ら一人を千騎と思ひ、我らが大将となつて挙兵せん！」

義仲はゆっくりと、兼光と兼平の顔を交互に見て、静かに目を閉じた。しばらくの刻、静寂が訪れた。その間、義仲は体に何かが宿る感じがして、一瞬、身震いした。

義仲はゆっくりと天井を仰ぎながら、目を見開いた。

そしてゆっくりと立ち上がると、
「今から兼遠殿にお会いする。」
と言いつつ、義仲は大広間を出て行った。

問い合わせ

観光振興課 ☎(67)1760 内線732

猛将 木曾義仲

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中！！

「俱利伽羅峠に想いを馳せて」

第24回 養父 中原兼遠の本意

義仲が兼遠の館を訪れると、兼遠が温かく迎え入れてくれた。

兼遠も以仁王の令旨が木曾にもたらされたことを聞き及んでいた。しかしながら、兼遠の立場は微妙であった。平家全盛の世において、信濃国の権守を務めるということは、平家から任官されたものであり、その平家を討つということは、反旗を翻すことになるからである。かといって、兼遠も、日頃から平家の横暴に対しては快く思わず、この混沌とした世の中を正すためには、源氏の由緒ある血筋をひく義仲こそが適任と思ったがゆえに、これまで、義仲を匿い、養ってきたのであった。

その事情を知っているがゆえに、義仲も悩んでいた。自分が挙兵すれば、今まで自分を匿ってくれた養父を窮地に立たせることになってしまう。そして信濃国が戦乱に巻き込まれてしまうかもしれない。自分の「挙兵」という決断は正しいのかどうか。「それがしは、平家を打ち倒し、庶民が暮らしやすい国を造りたいと考えております。それは今まで養父殿から教えていただいたことでございます。しかし、挙兵するということは、まさに、養父殿の立場を危うくするもの。」



義仲は兼遠に、率直な心の内を明かした。

「義仲殿、わしが殿を養ってきたのは、偏に、今このときのため。ようやく、望みがかなったというもののじゃ。わしに気兼ねはいらぬ。今より、この木曾の郎党は皆、殿の配下である。次郎（兼光）、四郎（兼平）も殿の家臣として、存分に用いられよ。よいな、次郎、四郎！」

義仲が振り向くと、そこには次郎、四郎が控えていた。

二人とも、事の成り行きが心配で兼遠の屋敷に駆けつけてきたのであった。義仲は二人の想いと兼遠の力強い励まし言葉に心を打たれた。

「信濃の豪族には、わしが協力を取り付ける。義仲殿、いざ、兵を挙げたまえ！」

義仲は兼遠に向かって、深々と頭を下げた。

「養父殿の恩義に報いるためにも、義仲、ただ今より挙兵いたします。」
兼遠は微笑みながら、うんうんと頷くと、いつの間にか、目に涙が浮かんでいた。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461

猛将 木曾義仲

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中！！

「俱利伽羅峠に想いを馳せて」

第25回 旗挙げ

治承4年（1180）義仲が挙兵するという風聞が木曾谷に広まった。

中原兼遠は、義仲が決起するよりも先、長年にわたり、信濃国の豪族に義仲への加勢を求めていた。

特に諏訪神社の神官（大祝）である金刺盛澄は、諏訪地方の有力領主であり、一族には強力な武士団がいたことから、兼遠は早くから金刺家に接近していた。

また、戦いには馬が必要であり、信濃国は名馬を産する地であることから、兼遠は、馬を飼育する「牧」を管理する滋野、海野、望月氏らの豪族にも加勢を求めた。

兼遠や義仲は、以仁王の令旨のこと



旗竿八幡宮（長野県木曾郡木曾町）

を記した廻文を豪族に発し、着々と軍勢を増やしていった。

このように慌ただしく軍団が結成されている最中、伊豆国（現在の神奈川県）で、義仲の従兄弟である源頼朝が挙兵し、石橋山で合戦が行われたことが伝え聞こえてきた。

義仲は、今こそ平家打倒の気運到来とばかりに、治承4年9月、挙兵した。義仲27歳のときである。

現在の長野県木曾郡木曾町日義には「旗竿八幡宮」が鎮座し、義仲はここで挙兵したと伝わっている。

1000騎の兵が意気揚々と集う中、源氏の白旗が高く掲げられた。

その中には、樋口兼光や今井兼平の姿、そして、巴も鮮やかな鎧を身につけ、義仲軍団の中核として参集していた。

義仲が「平家を討ち、国を正す」と檄をとばすと、参集した武者たちの「おお」と力強い闘の声の木曾谷に響き渡った。新しい時代を切り拓く風が源氏の白旗をなびかせた。

今回は、挙兵した義仲が、平家方の武將と初戦を戦う様子を紹介します。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461



猛将 木曾義仲

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中!!

倶利伽羅峠に想いを馳せて

第26回 初戦を制す 市原の戦い

治承4年(1180)9月、信濃国に戦乱が巻き起こった。

信濃国の豪族で平家方の武将であった笠原頼直は、義仲挙兵の報せを受け、義仲を攻める準備を始めた。

笠原頼直の動きを察知した源氏方の村山義直は、栗田寺別当範覚とともに、笠原勢を迎え撃つ。しかしながら、笠原頼直は武勇にすぐれた武将であり、次第に村山勢は不利に陥った。

村山義直は、義仲のもとに急使を遣わし、援軍を求めた。義仲はすぐさま軍勢を率いて加勢する。一気に形勢が逆転した笠原勢は信濃国から退却



「義仲勲功図會」に描かれた笠原頼直

し、越後国(現在の新潟県)へと逃れていった。

9月7日に行われた、この「市原の戦い」は、どこで戦われたのか、正確な場所は特定されていないが、長野県長野市の犀川と千曲川に挟まれたあたりと伝わっている。

また、義仲の初戦については「小見会田の戦い」であり、長野県の松本市と麻績村の境付近で合戦が行われたとの説もある。

初戦を勝利に導いた義仲の武勇は信濃の国中に響き渡り、次々に義仲に味方する武将が現れた。

義仲は、さらに、亡父、源義賢の拠点であった上野国(現在の群馬県)へ進出し、味方を募った。義賢の遺児ということもあり、上野国でも義仲に味方する武将が多く集まった。

義仲は信濃国に戻り、来るべき平家の襲来に備え、依田城(長野県上田市丸子)を拠点として、足場を固める。

今回は、平家方が大軍を率いて信濃国へ侵攻してくる様子を紹介します。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461

猛将 木曾義仲

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中!!

倶利伽羅峠に想いを馳せて

第27回 横田河原の戦い

市原の戦いに勝利した義仲は、軍勢を整えるため、依田城(現在の長野県上田市丸子)に拠点を構え、さらなる味方の獲得に努めた。

治承5年(1181)二月、義仲に再び危機が迫る。

市原の戦いに敗れ、越後国(現在の新潟県)の豪族、城氏のもとに逃れた平家方の武将笠原頼直は、義仲が平家を脅かす存在になると、城氏に危機感を訴えた。城助長(助水・資永)は、義仲を討つため信濃国(現在の長野県)へ侵攻しようとするが、出陣直前に急病のため、亡くなってしまった。

義仲が陥としたのもつかの間、助長の跡を継いだ弟の成長茂(助茂・助職)が、六月に、大軍勢を率いて信濃国へ侵攻、横田河原(現在の長野県長野市篠ノ井)に布陣した。

依田城を出た義仲は、途中、白鳥神社(現在の長野県東御市)で戦勝祈願をした後、三千の



依田城と木曾義仲館跡(長野県上田市)

兵を率いて横田河原へ向かい、川をはさんで城氏と対陣する。

義仲方の武将は勇猛に戦った。城氏よりも数のうえで劣勢にもかかわらず、「進退」の戦いの展開となった。

義仲は、信濃国の武士、井上光盛に、平家の赤旗を持たせ、城氏の後方から近づくよう命じる。城氏は、赤旗を見て、平家の援軍が来たことと誤解し、迎え入れようとするが、井上勢は本陣の目の前で赤旗をうち捨て、源氏の白旗を掲げて城氏の本陣に突入する。成長茂の軍勢は大混乱に陥り、態勢を立て直すことができず、越後国へと退却していく。

この「横田河原の戦い」については、「平家物語」「源平盛衰記」「吾妻鏡」などに記述があるが、合戦の日付や城兄弟の名前などが異なり、諸説々々である。成長茂の軍勢は四万騎であったとの説もある。余談ながら、この合戦場は、後世に上杉謙信と武田信玄が戦った「川中島の戦い」にほど近い場所にある。

奇襲作戦によってわずか三千の兵で城氏の大軍を撃ち破った義仲の武勇の名声はさらに高まり、北陸の武士団は平家に反旗を翻し、義仲の味方につくようになる。

今回は平・清盛の死と、北陸の武士団の動きを紹介します。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461

源頼朝が信濃国に侵攻してくる様子が記されている

猛将 木曾義仲

「俱利伽羅峠に想いを馳せて」

第30回 義高との別れ

寿永2年(1183)源 頼朝は義仲を討つため、信濃国(現在の長野県)へ侵攻してきた。

平家を打倒し、国の安寧を図ることが急務であるのに、源氏同士が争ってはいけないと考えた義仲は、越後国(現在の新潟県)と信濃国の国境にある熊坂山まで兵を退く。対する頼朝は善光寺平(現在の長野市)に布陣した。

戦いを避けようとする義仲に対して、頼朝は義仲のもとに使者を遣わし、叔父の志太義広と源 行家を差し出すか、もしくは義仲の息子 義高を頼朝の娘の婿として差し出すか、和平の条件を伝えてきた。

この和平案を聞いた義仲の陣中では議論が巻き起こった。義仲が一番信頼している家臣の今井兼平は、頼朝に屈することなく、戦いによつて雌雄を決しようと思見した。対して、新参の家臣たちは、今 頼朝と戦うのは不利であるので、和平案を受け入れるよう義仲に進言した。

自分を頼つてきた大事な叔父を裏切るわけにはいかず、さりとて自分の息子を差し出すことは忍びなく、義仲は苦悩した。

義仲は義高を誰もいない大広間に呼び、静かに語りかけた。

「お前を頼朝のもとへ遣わそうと思う。今の状況を分かっただけいい。すまぬ。」

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中!!



「いいえ。それがし、父上の役に立てることなら、喜んで鎌倉にまいります。」

と、義高が力強く答えた。

「うむ。わしは平家を打ち倒し、お前を迎えにいくからな！それまでの辛抱じゃ！」

「はい。父上、必ずや平家を打ち倒してくださいませ。」

義高は、自分と同じ年頃の海野幸氏ら同行者として、使者に伴われ、頼朝のもとへと向かった。頼朝は和平案を受け入れられたことに満足し、兵を率いて鎌倉へ戻っていった。

「源平盛衰記」によると、「義高は今井兼平の妹の子」と記されており、兼平の妹は巴とされていることから、義高は義仲と巴との間に生まれた子ということになる。しかしながら、別の文書には「義高は今井兼平の娘の子」との記述もあり、定かではない。

いずれにせよ、自分の息子を頼朝に差し出さなくてはならなかった義仲の無念の想いは計り知れない。

義仲は、いち早く、平家を打ち倒し、義高を連れ戻すことを決意したのであった。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461

猛将 木曾義仲

「俱利伽羅峠に想いを馳せて」

第31回 平家軍、北陸侵攻

平家は北陸で勢力を増している木曾義仲を討つため、何度か北陸に侵攻してきた。

越前国(現在の福井県)の水津でも戦いが繰り広げられたが、義仲の先遣隊が平家軍の侵攻を防いでいた。

ここに至り、平家の棟梁 平 宗盛は本格的に義仲を攻める決意を固め、寿永2年(1183)4月17日、北陸に向けて大軍を進めた。その数10万。平 清盛の孫 平 維盛が総大将を務め、その他、平家の主だった武将が連なり、怒濤のごとく越前国に攻め込んだ。

義仲は、信濃国(現在の長野県)の武将 仁科守弘の他、加賀国(現在の石川県)の武将 林光明、倉光成澄などを越前国に派遣し、燧ヶ城(火打城)を守備させた。仁科らは、城の周囲を流れる川をせき止め、水城にして平家軍の侵攻を妨げようとした。

しかしながら、燧ヶ城にこもっていた平泉寺長史 斎明は、平家の大軍に囲まれていることに脅え、源氏を裏切ることを決意し、城の弱点を平家方に知らせた。

斎明の裏切りにより、平家軍は、川をせき止めていた堰をこわし、水城であった燧ヶ城は陸続きになり、平家軍が一気に城を攻めたため、源氏方の武將は越前国から加賀国へ向け

て退却を始める。

現在の石川県津幡町を拠点にしていた武將 井家範方は、退却を潔しとせず、根上の松(現在の石川県能美市)で平家軍を迎え撃つが、大軍の前に、討ち死にしてしまう。

勢いにのつた平家軍は進軍を続け、越中国(現在の富山県)の目の前に迫ってきた。

次回もお楽しみに。

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中!!



燧ヶ城址(福井県南越前町)



ひんせん 斎明 斎明の井家範方
「源平俱利伽羅合戦図屏風」
俱利伽羅神社所蔵
(石川県河北郡津幡町)

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461

猛将 木曾義仲

〜俱利伽羅峠に想いを馳せて〜

第32回 平家軍の快進撃

平家軍は勢いにのって、越前国（現在の福井県）を越え、加賀国（現在の石川県）に進軍してきた。平家軍を先導するのは、燧ヶ城で源氏方を裏切った平泉寺長史・斎明であった。

加賀国では、義仲に味方した越中国（現在の富山県）の武將たちが評議を開いていた。

源平盛衰記には、評議の座に加わっていた武將の名前が記されている（石黒太郎光弘、高橋光延、泉三郎、福満五郎、千石太郎、向田二郎村高、水巻四郎安高、福田二郎範高、吉田四郎、加茂島七郎、宮崎太郎長康、入前小太郎など）。

平家軍は大軍なので、撤退して義仲の軍勢に合流しようという意見があったが、石黒光弘は「軍勢の多い少ないで戦いを行うのではなく、敵に一矢を報いるべきだ」と主張し、石黒氏・宮崎氏が約五百騎を率いて、安宅の渡しで平家軍を迎え撃った。

しかし、平家方で勇猛な武將として名高い越中前司盛俊が射た矢が石黒光弘に命中し、光弘は馬上から水中に落ちた。これを弟の福満五郎が助け出し、越中国まで退いていった。越前・加賀での平家軍の連勝は京の都に伝えられ、平家一門は大喜びであった。

斎明は、平家軍の総大将・平・維盛に、「木曾義仲は越後国（現在の新潟県）の国府にいる

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中!!



が、越中国と越後国の国境にある寒原（現在の親不知付近）という難所を押さえ、義仲の進軍を阻むべきである」と進言した。

維盛に寒原を押さえるよう命じられた盛俊は、五千騎を率いて加賀国と越中国の国境にある俱利伽羅峠を越え、現在の小矢部市を通り、般若野（現在の高岡市常国）付近まで進出してきた。

義仲のもとにも、越前・加賀での敗退の様子と平家軍が寒原を押さえようとしている情報が入り、早馬によりもたらされた。

義仲は、一番信頼している勇猛な家臣・今井四郎兼平を呼び寄せ、「今すぐに寒原を越え、越中国に進軍し、平家軍を押しとどめよ!」と命じた。

兼平は六千騎の兵を率いて、越中国へ向かった。

今回は今井兼平が平家軍の先遣隊と戦う様子を紹介しましょう。お楽しみに。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461



断崖絶壁の親不知（新潟県糸魚川市）

猛将 木曾義仲

〜俱利伽羅峠に想いを馳せて〜

第33回 般若野の戦い

今井兼平は六千騎の兵を率いて寒原を駆け抜け、越中国（現在の富山県）に進軍し、現在の黒部川・常願寺川・神通川といった急流の大河を越え、平家軍の先遣隊よりも前に御服山（現在の呉羽丘陵（城山））に着陣した。

現在の呉羽山の麓（富山市民俗民芸村付近）には、今井兼平が戦勝祈願したと伝わる八幡社が鎮座している。

兼平は、義仲軍の本隊が御服山まで進軍してきたことを装うため、山頂に源氏の白旗を立てて誇示した。

俱利伽羅峠から東に向けて進軍してきた越中前司盛俊は、御服山にたなびく数多の源氏の白旗を見て、すでに義仲が越中武士団を味

方につけ、越中国の半分まで進出してきたと誤認し、戦うのを避け、般若野（現在の高岡市常国）まで兵を退くことにした。

平家軍の先遣隊が退却する様子を御服山から見た兼平は、今が攻撃の好機とみて、御服山から般若野方面へ下り、盛俊の軍勢の背後に迫った。

寿永二年五月九日、夜明けとともに、兼平の軍勢六千騎が般若野にとどまっていた盛俊の軍勢に攻撃を仕掛けた。突然の急襲ではあったが、盛俊は勇猛なだけあって、兼平の軍勢を迎え撃ち、激しい攻防が繰り広げられた。

しかし、義仲四天王の一人と言われた兼平は攻撃の手をゆるめず、昼過ぎには、次第に盛俊の軍勢が劣勢に陥り、ついに、平家軍の先遣隊は俱利伽羅峠へと退却していった。

般若野の戦いに勝利したという報せは、すぐに越後国（現在の新潟県）の国府にいた義仲のもとに届けられた。ここに至り、義仲は自ら越中国に進軍し、平家軍と雌雄を決することを決意し、国府を出発する。

今回は木曾義仲が越中国に進軍してくる様子を紹介しましょう。お楽しみに。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461



兼平が戦勝祈願した八幡社（現在の富山市民俗民芸村）



般若野古戦場（現在の高岡市常国）



義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中!!

猛将 木曾義仲

倶利伽羅峠に想いを馳せて

第34回 弓の清水

般若野の戦いで今井兼平が平家軍の先遣隊を撃ち破ったという報せを受けた木曾義仲は、越後国（現在の新潟県）の国府を出立し、越中国（現在の富山県）を西へ向けて駆け抜けた。

義仲は、六動寺（現在の庄川河口付近）まで進軍し、ここに越中・加賀・能登・越前の武士団を集結させた。

約5万騎が義仲のもとに馳せ参じた。ここで、川の対岸にある越中国府（現在の勝興寺付近）に向けて関の声をあげ、示威行動をとった。義仲は、兼平が待機している般若野（現在の高岡市常国）に軍を進めた。

急な進軍と一所に軍勢が集結したことから、義仲軍は飲み水が不足する事態となった。飲み水がないと兵は戦う事ができない。

弓の清水



源義仲公銅像



移田八幡宮

義仲・巴の魅力を全面に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中!!



義仲が困っていると、地元民の松原大助が「地面に向かって矢を射れば水が湧き出るかもしれない」と進言した。義仲がその進言に従い、地面に向かって矢を射ると、矢が突き刺さったところから、水がこんこんと湧き出してきた。義仲軍はのどの渇きを潤すことができ、進軍を続けることができるようになった。

この水が湧き出た場所は「弓の清水」と名付けられ、現在も水が豊富に湧き出ており、そばには義仲の銅像が建立されている。

常国地区の「大悲寺観音堂」に安置されている「聖観音菩薩」は、水を得ることができたお礼に義仲が祀ったものと伝わっており、33年に1度、御開帳が行われる。

また、常国地区からさらに西に位置する中田地区には、今井兼平が戦勝祈願したと伝わる移田八幡宮が鎮座する。

「源平盛衰記」には、義仲が「御河端」で軍議を開いたと記されている。現在のどの場所でも軍議を開いたかは分からないが、地名からは、進軍ルート上の庄川の河川敷付近と考えられる。

今回は、義仲軍がさらに進軍を続け、現在の小矢部市内に着陣する様子をお伝えします。お楽しみに。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461

猛将 木曾義仲

倶利伽羅峠に想いを馳せて

第35回 義仲、小矢部川を渡る

般若野（現在の富山県高岡市）で今井兼平と合流した木曾義仲は、平家軍10万に対して義仲軍5万という兵力差から、平地での戦いを避けるための作戦を練った。義仲は平家軍を倶利伽羅峠に止めるため、信濃武士団の星名（保科）党を峠の麓にある日宮林（現在の小矢部市通沼の日宮神社）に派遣し、源氏の白旗三十旗を立てさせた。これを見た平家軍は、義仲本隊が大軍を率いて麓に着陣したと勘違いし、進軍を止めて、倶利伽羅峠に本陣を置いた。

勘違いし、進軍を止めて、倶利伽羅峠に本陣を置いた。



駒繫ぎの松▶



▲午飯観音

▼石柱（芹川碑）



ひとまず平家軍の進軍を止めた義仲は、現在の高岡市戸出付近に進出。戸出にも、義仲が馬を繋いだと伝わる「駒繫ぎの松」や、戦勝祈願をしたと伝わる戸出野神社など、義仲ゆかりの史跡が残されている。

砺波市と小矢部市の市境に近い砺波市小島に「午飯岡」の石碑が建っている。ここは、義仲が進軍の途中、休憩して、昼食をとった場所と伝えられている。また、砺波市高波に鎮座する川田八幡宮は義仲が戦勝祈願をしたと伝わっている。

義仲は、さらに軍を進め、現在の小矢部市域に入り、小矢部川を渡る。

小矢部市内各所の倶利伽羅峠の戦いに関する史跡等に、石柱が建立されている。これは、明治時代に発足した礪波山旧蹟保存会が、大正二年に記念碑を建立したもので、旧蹟名と由来が刻まれている。市内21箇所に建立されており、この石柱をたどることで、義仲の進軍ルートが浮かび上がってくる。

義仲が、ふと辺りを見渡すと、小高い丘の林の中に社殿が建っているのに気づく。

今回は、義仲が戦勝祈願する様子を紹介し、お楽しみに。

問い合わせ

商工観光課 ☎(67)1760 内線461

義仲・巴の魅力を全面に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中!!



猛将 木曾義仲

「俱利伽羅峠に想いを馳せて」

第36回 吉兆

俱利伽羅峠の麓に着陣した義仲は、小高い丘の中に社が建っているのに気づく。

「あの社殿は何か」

義仲が尋ねると、地元の武将 池田次郎忠康が前に進み出て、

「八幡神を祀る殖生八幡宮です」と答えた。

「なんと、この地に源氏の守り神である八幡神を祀る社があるとは。平家軍との戦いの前に、これは吉兆、ぜひとも、戦勝を祈願したいものだ」と語り、

「覚明はおらぬか」と、祐筆(書記)で、軍師的存在の大夫坊覚明を呼び寄せた。

「はっ、ここに控えております。」

「うむ。殖生八幡宮の御前で戦勝を祈願する。願文を認めよ。」

「かしこまりました。」

覚明はその場にひざまづき、巻物を取り出し、願文を認め始めた。

静寂の中、さらさらと願文を書き終えた覚明に向かって、義仲は願文を読み上げるよう命じた。



木曾義仲公戦勝祈願之図



戦勝祈願文(殖生護国八幡宮所蔵)

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中!!



「帰命朝礼……」から始まるこの戦勝祈願文は願文の中でも優れた名文と伝わっている。

文中、平家との戦いについて「君(朝廷)天皇家(の)ため、国(庶民)のために挙兵した。自分の立身出世、一族の繁栄のために挙兵したのではない」という、義仲の清らかな心、高い志が記されている。

寿永二年(1183)5月11日、現在の暦だと6月の頃で、当時は梅雨時のため、小雨が降っていたと伝わっている。

覚明が願文を読み上げ、社殿に鎬矢と鐵を奉納した瞬間、雨が上がり、雲が分かれて晴れ渡り、空から白鳩が舞い降りて、源氏の白旗の上を飛び回った。鳩は神の使いと考えられており、この様子を見た義仲は、兜を脱ぎ、八幡宮の社殿に向かい、ひざまづいて拜んだ。

そして、全軍に向かって、
「この戦、勝ちに間違いない」と檄を飛ばし、兵士の志気を鼓舞した。

兵士たちは「おお」と聞の声をあげ、戦意が一気に高まった。

この様子を見ていた平家軍の兵士たちは、あまりの出来事に恐れおののいたと「源平盛衰記」に記されている。

次回は、義仲軍が戦闘配置につく様子を紹介します。

問い合わせ

商工観光課 ☎(67)1760 内線461

猛将 木曾義仲

「俱利伽羅峠に想いを馳せて」

第37回 戦闘配置

殖生八幡宮で戦勝祈願を行った義仲は、主だった武将たちを集めて軍議を行った。平家軍は10万、対する義仲の軍勢は5万であることから、平野部での戦いを避け、俱利伽羅峠で戦うことに決めた。

また、夜襲をかけることを決めた。夜であれば、暗くて姿が見えないので、兵数の劣勢を悟られないようにできる、という心理作戦であった。

平家軍の一隊3万騎は志雄方面(石川県能登地方)に向かったため、義仲は叔父の源行家に1万騎を託し、志雄へ向かわせていた。そのため、俱利伽羅周辺の義仲の軍勢は4万であったが、義仲はそれを6隊に分けることを考えた。部隊を分けるといことは、一隊が少人数になり、不利になると思われるが、暗闇の中、敵がどこから出てくるか分からなくするという、これも一種の心理作戦であった。



▲平家軍本陣跡(猿ヶ馬場)



▶戦闘配置図

義仲は3万の軍勢を率いて、峠にいた平家軍の本陣の真下に布陣した。平家軍を平野に進出させないための、大きな賭けであった。平家軍は兵数で上回っているという驕りから、峠を動かなかった。

各部隊が配置づくまでの時間を稼ぐため、義仲は兵を差し向け、「塔乃橋」に陣取った平家軍の最前線と弓矢を射交わした。このとき、平家方が射た矢が義仲側の陣の地面に突き刺さったことから、「矢立」という地名がついた。

6隊は俱利伽羅峠の平家軍を包囲するよう、静かに移動した。

根井小弥太は2千騎を率いて、現在の小矢部市を領していた武将 蟹谷次郎を案内役に、鷺島松永を通して小耳入に到着し、弥勒山へ向かう。

義仲・四天王のひとり、今井兼平は2千騎を率いて、越中国の武将 石黒光弘、高橋光延を案内役に日宮林へ向かう。

信濃国の武将 余田次郎ら3千騎は、越中国の武将 宮崎太郎、向田兄弟を案内役に、安楽寺を通り、金峰坂を上り、北黒坂を通過して律原に向かう。

巴も1千騎を率いた大将として戦陣に加わり、越中国の武将 水巻四郎を案内役に鷺岳へ向かう。樋口兼光は3千騎を率いて、加賀国の武将 林氏、富樫氏を案内役に、平家軍の後背を襲うため、敵に悟られないよう、遠く迂回して、現在の石川県津幡町竹橋まで進軍する。

義仲は各部隊が配置につき、夜が訪れるのを待つ。刻一刻と、戦いの火蓋が切られる時が近づいていた。

次回は、史上名高い「俱利伽羅峠の戦い」を紹介します。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461



義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト発動中!!

猛将 木曾義仲

〜 倶利伽羅峠に想いを馳せて〜

第38回 火牛の計

倶利伽羅峠に陣をおいた平家軍の総大将、維盛は、決戦は明日と決め、全軍に休息をとるよう命じた。

旧暦5月11日は現在の6月にあたり、標高約250mの倶利伽羅峠は、夜でも蒸し暑く、京の都からの進軍の疲れも加わり、兵士たちは鎧を脱いで、兜をまくらに眠りこけてしまった。

深夜、突然、鬨の声があがり、法螺貝が鳴り響き、太鼓が打ち鳴らされた。

平家軍を包囲するように配置にしていた義仲軍全軍が鬨の声にあわせて、平家の本陣に攻め寄せてきた。「源平盛衰記」には、義仲軍の鬨の声は、山も崩れ、巖も砕け散ると思われるほどの大きさであったと記されている。

突然の夜襲に、油断していた平家軍の将兵たちは驚き戸惑う。自分の刀や弓がどこにあるのか分からず奪い合う者、鎧を着けずに逃げ出す者など、平家軍の本陣は一気に混乱状態に陥った。維盛は、逃げる兵士を押し止めようとするが、将兵までもが恐怖心から逃げ出す有様。

ここで、義仲は最後の作戦を実行する。角に松明がついた牛を平家軍に向かわせた。この奇襲作戦「火牛の計」は「源平盛衰記」のみに記述があり、約500頭の火牛が用いられたと記されている。

猛烈な勢いで襲いかかってくる火牛に平家

義仲・巴の魅力を全面に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中!!



火牛の像(倶利伽羅古戦場)



源平倶利伽羅合戦図屏風
(石川県津幡町 倶利伽羅神社所蔵)

軍の兵士は押しつぶされたり、はね飛ばされてしまう。
暗闇の中、必死で逃げる平家の武将たち。唯一、敵の攻めてこない方向に兵士たちが殺到する。しかし、これも義仲の策略であった。その先には深い谷底が広がっていた。
平家の将兵たちは逃げ道があると錯覚して、次々と、その崖下へと転がり落ちていった。「源平盛衰記」には「父や子、主人や家来、人馬が落ち重なり合い、約1万8千騎の亡骸が10余丈(約30m)の谷を埋め尽くした」と記されている。
この夜襲によって、平家軍のほぼ大半が討ち取られた。
次回は、勝利に沸く義仲軍の様子を紹介します。

問い合わせ

商工観光課

☎(67)1760

内線461

猛将 木曾義仲

〜 倶利伽羅峠に想いを馳せて〜

第39回 源平盛衰の岐路

「はっはっは。やった、やったぞ!」
礪波山の頂に立つ男が咆哮した。
腹の奥底から響いてくるような不気味な笑い声が倶利伽羅の谷をこだました。

その瞳には、眼下に広がる谷を埋め尽くす、夥しい数の平家軍の将兵の死体が映し出されていた。漆黒の闇の中、目をこらすと、谷底には人馬が折り重なり、うめき声や悲鳴が地をはって鳴り響いていた。まさに阿鼻叫喚の地獄絵図の様相である。

平家軍7万騎は義仲の奇襲作戦「火牛の計」により、そのほとんどがこの谷底へと落ちていった。
「うおー、うおー」

義仲軍の将兵らは、平家の大軍を撃ち破ったという興奮に包まれ、異様な昂揚状態にあった。越中武士団の蟹谷次郎らが勝利を祝って乱打する太鼓が、遙か遠くまで響きわたっていた。

平家の敗走兵は加賀



国へと逃れようとするが、義仲方に追われ、次々と討ち取られていった。
今までは平家の政に不平不満を抱きながら従っていた庶民らも、ここぞとばかりに反旗を翻して、敗走兵を見つけては追いつめていった。
その様子を義仲が不敵な笑みを浮かべ、眺めていた。
義仲のそばにいた巴は一瞬、背筋の凍るような思いがした。
義仲の顔を松明の明かりが赤く染め、揺れ動く影に得体の知れない恐怖心がわき起こった。
あの心優しい駒王丸はもういない：修羅の道を歩み出した炎を見つめる義仲の背中には冷たく、そして大きく感じた。

次回は、小矢部市内に残る「倶利伽羅峠の戦い」に関する史跡について紹介します。

問い合わせ

商工観光課

☎(67)1760

内線461

義仲・巴の魅力を全面に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中!!



猛将 木曾義仲

義仲、巴の魅力を全面に！
大河ドラマ「義経」プロジェクト
発動中!!

倶利伽羅峠に想いを馳せて

第40回 激戦を物語る史跡

小矢部市内には、倶利伽羅古戦場や増生護国八幡宮など、「倶利伽羅峠の戦い」に関する史跡等が多く残されている。大正時代、礪波山旧蹟保存会が、市内の義仲ゆかりの史跡に石柱を建立した。約20箇所に石柱が建立されており、義仲軍の進軍ルートがうかがえる。

野端地区には、義仲が戦勝祈願のために鎧兜を埋めたと伝わる「將軍塚」があり、そこにも石柱が建てられている（石柱には、首級を埋めたと記されている）。

また、「聲乃口」は、義仲軍が関の声をあげた場所と伝わっており、隣接する「北反敵遺跡」からは、牛や馬の足跡が検出されたことで知られている。義仲の時代よりも新しい時期のものである可能性が高いことから、直接、「火牛の計」があったことの立証にはなら

ないが、当時、農作業などに牛が用いられていたことがうかがえる。

「源氏ヶ峰」は、もともと平家軍が陣をおいていたとされる場所だが、義仲軍が攻め落とし、その地名が名付けられたと伝えられている。

平家軍の将兵が転がり落ちた谷は、その阿鼻叫喚の様相から、後に「地獄谷」と呼ばれ、現在もその地名が残されている。

源氏ヶ峰を地獄谷に向かっていると、いくつもの滝が点在している。その1つ「千歳ヶ滝」は「源平盛衰記」に記されている、平家軍の将兵や馬などが落ち重なった場所と考えられている。「盛衰記」には、十丈（約30m）の滝が死体で埋まったと記されている。死体の重さで、平家軍の将兵らの血や膿が流れ出て、川となり、後に「膿川」と名付けられた。

このように、市内には「倶利伽羅峠の戦い」の激戦の様子を伝える史跡が多く残されている。

次回は、敗走する平家軍の中において、勇猛に戦った武將たちについて紹介します。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760

内線461



▲將軍塚



千歳ヶ滝

猛将 木曾義仲

義仲、巴の魅力を全面に！
大河ドラマ「義経」プロジェクト
発動中!!

倶利伽羅峠に想いを馳せて

第41回 平家の武將たち

倶利伽羅峠の戦いで大敗北を喫した平家軍。

平家軍の多くの将兵が加賀国へ逃れる中、義仲の軍勢に対して勇猛に戦った平家方の武將もたくさんいた。その一人、平 為盛は、一度は敗走するが、武士としての面目を保つため、義仲軍に逆襲する。しかしながら多勢に無勢、義仲四天王の樋口兼光に討ち取られたと伝わっている。

為盛を弔うために築かれたと伝わる五輪塔が旧石動町役場前（現在の石動中学校グラウンド付近）にあったが、後に倶利伽羅古戦場の源平供養塔のそばに移設された。

また、「源平盛衰記」には、平家方の武將 館太郎貞康が80騎で参戦していたことが記されている。貞康の叔父の小坂三郎宗綱は、自分分は老齢なので、潔く戦って死ぬと貞康に告げた。貞康も、平家軍10万、義仲軍5万で、勝利は確実であったのに、合戦に敗れたとあっては恥と感じ、討ち死にを覚悟し、義仲軍に攻め込んでいった。貞康は義仲

方の武將大見（太見）七郎光能と刃を交えるが、両方とも討ち死にし、宗綱も義仲の軍勢に討ち取られた。

館貞康の墓は、本観寺（小矢部市八講田）にあったと伝わっているが、長い歴史の中に埋もれ、今は所在が分からなくなっている。貞康らの奮戦の様子は本観寺の石碑に刻まれており、深く散っていった武將たちのはかなさを物語っている。

平清盛の七男である平 知度は、志雄（能登方面）で戦っていたが、倶利伽羅峠での平家軍の敗走を知り、駆けつけてきた。知度は、義仲方の武將岡田親義と戦い、親義を討ち取ったが、これ以上逃げることはできずと悟った知度は自害した。現在、石川県津幡町の平谷に知度を弔うために築かれたと伝わる「知度塚」がある。

義仲軍は倶利伽羅峠の戦いには圧倒したものの、志雄に向かった義仲の叔父 源 行家は苦戦を強いられていた。

義仲は、叔父の救援のため、志雄へと転進する。

次回は、義仲が、加賀国へ敗走した平家軍を追撃する様子を紹介します。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760

内線461



本観寺石碑



為盛塚

猛将 木曾義仲

義仲・巴の勢力を全国に！
大河ドラマ「義経」プロジェクト
発動中!!

倶利伽羅峠に想いを馳せて！

第42回 敗走する平家を追って

倶利伽羅峠の戦いにおいて、義仲軍に参陣していた女武者 葵御前が討ち死にした。

葵御前は栗田寺別当 範覚の娘と伝わっており、信濃国で義仲と出会ってから行動をとりにしてきたが、倶利伽羅峠での激戦の中、平家軍に討ち取られた。

義仲は葵御前のために、峠の麓に塚を築いて弔ったと伝えられている。

葵御前の死という悲しみを乗り越え、義仲は志雄（能登方面）に向かった叔父の源 行家の救援に向かう。義仲軍の攻勢をうけた平家軍は撤退を始め、佐良山（現在の金沢市金石町付近）に集結する。

義仲軍は国境を越えて、加賀国に進軍し、現在のJR金沢駅西口（金沢市広岡町）に鎮座する平岡野神社に陣



葵塚



弓堀りの井（石川県白山市）

を置いた。義仲の進軍ルート上には義仲が布陣したと伝わる松根城跡（小矢部市内山・金沢市松根町）や、義仲が築城したと伝わる堅田城跡（金沢市堅田町）などが残されている。

義仲軍の進軍の勢いは止まらず、平家軍は安宅に向けて撤退を始める。

義仲は浜沿いのルートで平家軍を追撃するが、途中、大河が義仲の進軍を妨げる。義仲が加賀国に入ったのは現在の暦で6月頃であり、当時は梅雨のため、川が増水していた。

義仲軍の兵士たちは、お互いに手と手を取り合って川を渡ったと伝わっている。そのため、この川は、現在「手取川」と呼ばれている。

川の近くには義仲が川の減水と戦勝を祈願したと伝わる笠間神社（石川県白山市）があり、水の確保に困っていた義仲が、弓で地面を掘ると水が湧き出てきたと伝わる「弓堀りの井」が残されている。

手取川を越えた義仲軍は、平家軍を追撃し、さらに西へと進軍する。

次回は、義仲の命の恩人 斎藤実盛の最期について紹介します。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461

猛将 木曾義仲

義仲・巴の勢力を全国に！
大河ドラマ「義経」プロジェクト
発動中!!

倶利伽羅峠に想いを馳せて！

第43回 篠原の戦い

哀しみを乗り越えて！

義仲軍に安宅の防衛網を破られた平家の武将たちが我先にと逃げる中、篠原（石川県加賀市）で、平家方の武者が一騎、義仲の軍勢の前に立ちどかした。

義仲四天王の一人、手塚光盛が進み出て、

「わしは、手塚光盛。名を名乗り給え」と大音声あげ、戦いを挑んだ。

平家方の武者は、「訳あって名を名乗らぬが、わしを倒して、義仲殿に首を見せるがいい」と言いつて、光盛に組みかかってきた。

しばらく組み合った後、最後は光盛が平家方の武将を討ち取った。

光盛は義仲のもとに参じ、首を差し出し、事の次第を伝えた。

義仲はじつと首を見つめ、呟いた。

「これは、斎藤別当実盛殿が首ではないか？」

斎藤実盛は、駒王丸（義仲の幼名）が二歳のとき、父源 義賢が討たれ、駒王丸も殺されそうになったところを実盛が匿い、信濃国に逃がしてくれた、義仲に



木曾義仲像（篠原古戦場跡）

とつては命の恩人であった。

義仲は、実盛を見知っている家臣の樋口兼光を呼び寄せた。

「これは間違いなく実盛殿の首……」

兼光が、声をつまらせながら義仲のほうを向く。

「実盛殿なら年老いて髪が白いはず。しかし黒髪なのはなぜだ」

と義仲が言うので、兼光は、そばの池の水で髪を洗った。

すると、白髪のお武者であることが分かった。

「実盛殿は生前、老武者と悟られないよう、髪を黒く塗り、潔く戦って死にたいと申しておりました」

義仲は命の恩人を討ち取らなくてはならなかった運命を哀しみ、涙を流した。

斎藤実盛、享年七十三。義仲は実盛の兜を多太神社（石川県小松市）に奉納し、手厚く供養した。

現在、篠原古戦場には、実盛の髪を洗った「首洗池」が残っており、近くには実盛を弔うために築かれた実盛塚がある。

哀しみを乗り越え、義仲は加賀国と越前国（現在の福井県）の国境を越えて、平家の敗走兵を追撃する。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461

猛将 木曾義仲

義仲、由の勢力を全国に！
大河ドラマ「義経」プロジェクト
発動中!!

倶利伽羅峠に想いを馳せてー

第44回 山門牒状

越前国に進軍した義仲は、大塩八幡宮(福井県越前市)に陣を置き、軍議を開いた。

「都に入るためには、比叡山延暦寺を味方につけるべし」と、覚明が進言する。

「よし、それでは、覚明、延暦寺に書状を認めるのじゃ」「承知 仕りました」



大塩八幡宮(福井県越前市)

覚明は、平家の横暴を訴えつつ、義仲が国のため、民のために平家追討の兵を挙げたことを書状に認め、延暦寺の衆徒に送った。

義仲は木ノ芽峠を越えて、近江国(現在の滋賀県)に進軍する。

途中、義仲は意富布良神社(長浜市木之本町)で戦勝を祈願する。神社の境内には義仲が兜を置いたと伝わる「兜石」が残っている。

義仲軍は、琵琶湖の東側を進み、先陣は野洲の河原(野洲市)に陣を構え、義仲は蒲生野(東近江市)

兜石(意富布良神社・滋賀県長浜市木之本)

に着陣した。

延暦寺からの返答を待つ間に、義仲軍の兵糧が尽き始めてきた。義仲は近くの百済寺(東近江市)に使者を遣わし、米の提供を願った。百済寺では、義仲の味方につくことを決め、五百石の兵糧米を提供した。

その頃、比叡山では、覚明が認めた牒状をめぐって評議が開かれていたが、衆徒の意見は対立していた。平家方も、延暦寺に味方につくよう書状を送っていたのである。

平家方に味方すべきである、いや、富士川や倶利伽羅峠の戦いで敗北した平家方は運が傾きはじめているので、義仲に味方すべきである、と意見が割れていた。

評議の末、延暦寺は義仲に味方することを決議し、東塔の総持院の庭で遠火を焚き、義仲に味方することを伝える。

この様子を見た義仲は「いざ、京に進軍する！」と、全軍に号令し、進軍を開始する。

琵琶湖を舟で渡った義仲は、延暦寺に招かれ、総持院に陣を置き、眼下に見える京の都への進軍の時を待つ。

問い合わせ 商工観光課

(67)1760 内線461

猛将 木曾義仲

義仲、由の勢力を全国に！
大河ドラマ「義経」プロジェクト
発動中!!

倶利伽羅峠に想いを馳せてー

第45回 義仲、入京

比叡山延暦寺に陣を構え、京の都への進軍を待つ木曾義仲。

義仲の軍勢に恐れをなした平家の棟梁、平・宗盛は、倶利伽羅峠の戦いで将兵を失い、都を守るができなことを悟り、後白河法皇を奉じて、都を去り、西国へ逃れようと図る。

平家方の将兵が後白河法皇の屋敷に向かうと、そこに法皇の姿はなかった。平家方の動きを察した法皇は、密かに比叡山に逃れていたのである。

慌てた宗盛は、京の都に火を放ち、平家一門は西国へと向かう。中には、妻子を連れていくことができず、家族と離れ離れになる将兵たちもいた。

倶利伽羅峠の戦いで大敗北を喫した平・宗盛も妻子を都に残し、都を立ち去った。

寿永2年7月28日、ついに、木曾義仲は比叡山を下り、京の都への進軍を開始する。同時に、琵琶湖の東西両方面から、義仲に味方した北陸武士団などが進軍



▲後白河法皇に拝謁する木曾義仲と源行家「義仲勲功図會」

してきた。

都の人々は、今まで平家の横暴に我慢してきただけに、義仲の入京を歓喜の声で迎えた。

騎乗にて、威風堂々と都の大路を進む義仲のまわりには、樋口兼光、今井兼平などの義仲四天王をはじめ、信濃武士団が付き従っていた。義仲の隣には巴御前の姿もあった。源氏の白旗が都にはためくのは平治の乱以来のことであった。

比叡山を下りた後白河法皇は、さっそく義仲と、義仲の叔父・源・行家を蓮華王院御所に呼び寄せた。

法皇の前に跪いた義仲と行家。法皇は、源氏一族の中で、いち早く平家を京の都から追いやった義仲の功績を讃え、「朝日(旭)將軍」の称号を与える。義仲にとっては、たいへん名誉なことであった。

続いて、義仲は法皇から平家追討の院宣を賜る。昨日までは官軍であった平家一門が追討の対象になった。「君のため、国のため」に挙兵し、各地で戦ってきた木曾義仲。

義仲は、今まさに、生涯で最高の時を迎えていた。

問い合わせ 商工観光課

(67)1760 内線461



◀入京した木曾義仲

猛将 木曾義仲

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ「義経」プロジェクト
発動中！！

第46回 京の治安回復

都の人々の歓喜の声を受けて迎え入れられた木曾義仲。

幼くして父を失い、木曾の山中で離れの時を過ごし、長く激しい戦いの末にたどり着いた京の都。後白河法皇から朝日將軍の称号を賜った義仲は、人生で最高の栄誉に浴していた。

法皇は義仲に期待し、京の治安回復と、西国へ逃れた平家追討を命じる。京中守護の責任者を命ぜられた義仲は、家臣に分担させて御所などの警護にあたらせた。

8月、平家追討の論功行賞が行われた。義仲は「従五位下左馬頭兼越後守」に、源行家は「従五位下備後守」に叙任された。無位無官であった義仲にとつては破格の昇進であった。

しかし、この叙任に対し、行家が抗議した。行家は、甥である義仲の躍進が妬ましかったのである。この行家の行動が、後に法皇や朝廷の人々の義仲

俱利伽羅峠に想いを馳せて

に対する見方を変化させるきつかけとなる。

そのような中、義仲は京の治安回復を図ろうと奔走するが、一向に効果が現れなかった。義仲入京前から凶作が続き、飢饉により多くの餓死者が出ていた。それに追い打ちをかけるように、平家が都落ちする際、食糧を持ち去っていたのである。

義仲直属の軍勢だけでなく、総勢約5万騎の源氏方の兵士たちが入京したこと、京の食糧事情は一気に悪化した。

京中で、兵士が庶民の家に乱入し、食糧を奪うなど、乱暴狼藉が多発する。義仲は取り締まりを強化するが、件数が多く、混乱は続いた。

「平家が去りて、都が平穩になるはずが、都人は乱暴狼藉に怯えているではないか。」

平家在京中も狼藉は発生していたが、義仲の行動力を見込んでいただけに、法皇の義仲に対する期待は急に薄らいでいった。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461

猛将 木曾義仲

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ「義経」プロジェクト
発動中！！

第47回 皇位継承

俱利伽羅峠に想いを馳せて

源氏の兵士らによる京での乱暴狼藉の対処に、頭を悩ませる木曾義仲。当時の公卿の日記には、義仲は狼藉を行つた者を厳しく処罰したと記されているが、それでも都の混乱は続いた。その義仲に新たな悩みが生じた。

平家は都落ちの際、後白河法皇の孫にあたる安徳天皇を奉じて西国へ向かったため、法皇は新たな天皇を即位させようとしていた。幼い天皇であれば、自分が政治の実権を握ることができると法皇は考えていた。

しかし、義仲は、新しい天皇は平家追討の令旨を発した後白河法皇の第三皇子 以仁王の遺児である北陸宮こそがふさわしいと考えていた。義仲は、北陸宮を宮崎城(富山県朝日町)に匿い、宮を奉じていたからこそ、平家追討の大義を得ており、越中や加賀の武士団は義仲を支持したのである。

義仲は北陸宮を天

皇に推挙した。

法皇は、皇位継承に一介の武士が口をはさむことを苦々しく思ったが、義仲の意向を無視することもできず、占いをういて新しい天皇を選ぶことにした。結果、北陸宮は天皇には選ばれなかった。

占いで天皇を選ぶことの正当性を義仲は非難する。このことが法皇の逆鱗に触れた。

また、朝廷も、身分をわきまえず意見する義仲のことを疎んじるようになる。京中の乱暴狼藉が鎮まる気配を見せない中で、義仲への期待は急激に薄れていった。

後白河法皇は、義仲を京から遠ざけるため、早急に西国へ向かい、平家を追討するよう催促する。

しかし、十分な食糧を確保できない中、戦地に赴くことを危惧した義仲は、京を動かうとしなかった。

乱暴狼藉や皇位継承など、様々な葛藤の中で、義仲の苛立ちは募っていくばかりであった。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461

◀北陸宮御所跡付近(富山県朝日町笹川地区)



猛将 木曾義仲

義仲・田舎の魅力を全面に！
大河ドラマ「義経」のロケ地
発動中！！

倶利伽羅峠に想いを馳せて！

第48回 田舎人

京で多発していた兵士による乱暴狼藉は、義仲の厳しい取り締まりにより、鎮まりつつあった。

しかし、今度は、義仲が都人に「田舎人」と評される出来事が起こった。

ある日、猫間中納言・藤原光隆が、相談事のため義仲の屋敷を訪れた。

義仲の家臣が「猫間殿が参られました」と取り次ぐと、義仲は「猫が人に会いに来たのか」と応じた。家臣が、光隆は猫間殿に住まわれている公卿であることを伝えると、義仲は光隆を屋敷に招き入れた。

義仲は光隆を「猫殿」と呼び、昼時に訪ねてきたのだからと、昼食の用意を家臣に命じる。

そして、膳に無塩の（新鮮な）平茸の汁、おかず三種、大盛りのご飯が振舞われた。腕は義仲が仏事に用いる大事な器であり、義仲としては心尽くしのおもてなしのつもりであったが、貴族である光隆



◀暴走する牛車

にとつては粗末な食事、食べる気になれなかった。

義仲が「猫殿は少食ですな」と言うのと、光隆はあきれて、相談事を話さずとなく義仲の屋敷を立ち去った。

また、ある日、義仲は御所に参内するため、身支度を整え、牛車に乗り込んだ。牛車を動かす牛使いは、もとは平家に仕えていた者であったので、義仲に恨みを抱き、牛に強く鞭をあてた。驚いた牛が勢いよく走り出したので、義仲は牛車の中で転倒してしまう。

義仲の家臣が暴走する牛車に追いつき、車を止め、牛使いを注意する。

御所へ到着すると、義仲は牛車の後ろから降りようとした。雑色（御所の雑用係）が「乗るときは後ろから降り、降りるときは前から降りるものです」と伝えたが、義仲は作法を気にせず、後ろから降りたという。

これらの話を聞いた都人が、義仲のことを「都の礼儀作法を知らない田舎者だ」と噂したことが、平家物語に記されている。

問い合わせ 商工観光課
☎(07)1760 内線461

問い合わせ 商工観光課
☎(07)1760 内線461

猛将 木曾義仲

義仲・田舎の魅力を全面に！
大河ドラマ「義経」のロケ地
発動中！！

倶利伽羅峠に想いを馳せて！

第49回 十月宣旨

源氏一族の中でいち早く入京を果たし、新しい時代を切り拓こうと希望に満ちていた木曾義仲。

しかしながら、京の治安回復の遅れや皇位継承に口をはさんだことから、後白河法皇に疎んじられた義仲は、物事が思い通りに進まず、葛藤の日々を過ごしていた。

そのような中、法皇から、平家追討の兵を出すよう、何度も督促される。事実、平家は西国へ落ち延びたものの、勢力を盛り返しつつあり、あなどりがたい状況となっていた。

ついに、義仲は西国へ赴くことを決意する。義仲は法皇から節刀を授かり、留守中の京の守護を家臣の樋口兼光に託し、軍を率いて京を発った。

後白河法皇は、目障りな義仲が西国へ向かったことに安堵した。そして、義仲が不在の隙について、鎌

倉の源頼朝に使者を遣わし、早々に入京するよう催促する。あわせて、頼朝に越後国や信濃国を支配下に置くことを認める内容を伝えた。いわゆる「十月宣旨」である。

法皇は、義仲の反発を恐れ、頼朝の北陸支配は除いたものの、信濃国は義仲の本拠地であり、義仲にとって承服しかねる内容であった。

しかしながら、この十月宣旨は朝廷と頼朝の間で秘密裏に工作がすすめられていたもので、義仲が知るようになるのはまだ先のことであった。

京の不穏な動きを知らぬ義仲は、意気揚々と備前・備中（現在の岡山県）へと軍勢を進めていた。久しぶりの行軍に、義仲は機嫌がよく、この戦いで平家を一気に撃ち破り、名譽挽回を果たそうと意欲をみなぎらせていた。

だが、進軍中に、義仲の想定外の出来事が起こる。なんと、倶利伽羅峠の戦いで降伏して、義仲の軍勢に加わっていた武将・妹尾兼康が、義仲に反旗を翻したのであった。

問い合わせ 商工観光課
☎(07)1760 内線461



◀行軍の様子 (『平家物語』より)

問い合わせ 商工観光課
☎(07)1760 内線461

問い合わせ 商工観光課
☎(07)1760 内線461

猛将 木曾義仲

義仲・田の魅力を全面に！
大河ドラマ「義経」プロジェクト
発動中!!

「倶利伽羅峠に想いを馳せて」

第50回 水島の戦いと妹尾の裏切り

平家は都落ちした後、西国の兵力を集結させ、讃岐国（現在の香川県）の水島を拠点として勢力を拡大しつつあった。

義仲は、水島攻めの拠点を築くため、矢田義清を大将に命じ、備中国（現在の岡山県）の水島へ先行させた。

義清が兵船を集め、渡海しようとしたところ、平家の水軍が攻め寄せてきた。「源平盛衰記」には、平家軍は平重衡・平通盛が大将軍となり、平教経・越中次郎兵衛盛嗣らの勇猛な武将が攻撃してきたと記されている。

海上での戦いに慣れている平家に

対し、船の操作に不慣れた義仲軍は平家方の巧みな攻撃に苦戦した。

戦いの最中、日食が起る。平家方は日食が起ることを事前に知っていたが、義仲方は周囲が闇に包ま

れたことに動揺する。

この隙をついて、平家軍は総攻撃をかけ、義清をはじめ、海野四郎や高梨高信らの義仲方の武将たちが多く討ち取られてしまった。

水島の戦いの敗戦を知った義仲は備中国へ急行する。

この義仲の軍勢の中に妹尾兼康という武将が加わっていた。兼康は備中国を領していた平家方の武将で、倶利伽羅峠の戦いにおいて義仲に敗れ、捕虜となったが、義仲がその武勇を惜しみ、配下に加えていた。

「源平盛衰記」には、兼康は義仲の家臣倉光三郎の軍勢に率いられて行軍していたが、平家方への忠義を感じ、備前国（現在の岡山県）付近で、倉光氏を討ち取り、備前・備中・備後（現在の岡山県）から兵を集め、義仲に反旗を翻したと記されている。

このことを知った義仲は、兼康を討つため、義仲四天王の今井兼平を先行させる。

問い合わせ 商工観光課

☎(07)1760 内線461



◀「水島の戦い」の様子（「平家物語」より）



猛将 木曾義仲

義仲・田の魅力を全面に！
大河ドラマ「義経」プロジェクト
発動中!!

「倶利伽羅峠に想いを馳せて」

第51回 妹尾最期

水島の戦いで、多くの味方の将兵を失った木曾義仲。さらに、妹尾兼康に裏切られ、怒り心頭の義仲は、兼康を討つため、義仲四天王の一人 今井兼平を派遣する。

兼康は板倉城（岡山県岡山市）に立て籠もり、義仲の軍勢を待ち構えていた。

しかし、義仲軍が攻めてきたと聞いて、兼康に味方した兵たちは逃げてしまった。兼康も逃げるが、兼康の子兼通が足を痛め、動けなくなってしまう。

子を捨てて逃げ落ちることを恥に感じた兼康は、我が子をかばいつつ、勇猛に戦うが、親子ともども義仲軍に討ち取られてしまう。

兼康を討ち取った義仲は、水島の戦いに勝利して勢いを盛り返しつつある

平家方との戦いに向かおうとした。

その義仲のもとに、京で留守を任せていた樋口兼光からの驚くべき一報が飛び込んできた。

「源行家殿が、後白河法皇様に、殿のことを悪しざまに申しております。法皇様は鎌倉の源頼朝殿に上洛を促しているようです。」

義仲は、法皇の真意を確かめるため、平家との戦いを取りやめ、急ぎ京へ引き返す。

義仲が戻ってくることを知った行家は、恐れをなして、京を立ち去る。

京に戻った義仲の屋敷に法皇の使者が訪れた。

朝廷に仕える公卿の九条兼実の日記「玉葉」には、法皇の使者に対して、義仲が「頼朝に都への上洛を勧めたこと、そして東海・東山の支配権を与えたことについて、義仲生涯の遺恨である」と抗議したと記されている。

庶民は、法皇と義仲が対立していることを噂した。都は騒然とした雰囲気

問い合わせ 商工観光課

☎(07)1760 内線461



◀弓矢で防戦する妹尾兼康（「平家物語」より）



猛将 木曾義仲

義仲、巴の能力を全面に！
大河ドラマ勝敗プロシフト
発動中!!

倶利伽羅峠に想いを馳せて

第52回 法住寺殿の戦い

木曾義仲のもとに、後白河法皇の使者として平 知康が派遣された。知康は、都の治安回復が滞っているのは義仲が取り締まりを怠っているからだ、と強く非難した。

義仲は、鼓の名手であった知康に「裁判官という呼び名は人にたたかれたから名づけられたのか」と侮辱した。知康は、義仲が礼儀をわきまえず、乱暴狼藉を押しとどめる能力がないと法皇に訴えた。

法皇は、知康の告げ口を聞き入れ、義仲を見限り、御所(法皇の邸宅)を警護する武士や比叡山延暦寺などに義仲を追討するよう命じ、法住寺殿(御所)に兵を集め始めた。

このことを聞き及んだ義仲は、激怒する。

「平家を都から追い出したのは自分である。それなのに知康の告げ口により、自分を攻めようとするのは許せない」

法住寺殿を攻める準備を始めた義仲に対して、家臣の今井兼平が、法皇に対して弓引くこ

との非を訴えた。しかし、義仲は、武士としての名誉にかけて、法皇と戦う決意を述べ、寿永2年(1183)11月19日、法住寺殿へ攻め寄せた。

水島の戦いで義仲は多くの将兵を失っていたものの、義仲軍の士気は高く、猛攻の前に、法皇方の軍勢は逃げ始める。しばらくして義仲は御所を制圧し、逃げた法皇も捕らえられてしまう。

御所を焼き討ちするという暴挙とともに、延暦寺の高僧までもが討ち取られるとは前代未聞であるということが、当時の公卿の日記に記されている。

義仲は、法皇の近臣たちの官職を解き、関白松殿基房とはかり、基房の子の師家を摂政に任じるなど、自分の都合のいい人事を執り行った。

この暴挙に、義仲に味方していた武将たちが恐れ多いことだと話し合い、離反していった。

後世、義仲が悪いイメージで語られるのは、この出来事が大きく影響している。法皇の挑発によってしまった、義仲の不覚であった。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461

猛将 木曾義仲

義仲、巴の能力を全面に！
大河ドラマ勝敗プロシフト
発動中!!

倶利伽羅峠に想いを馳せて

第53回 迫りくる鎌倉の軍勢

木曾義仲が平家追討のため西国へ赴いていた隙に、後白河法皇は鎌倉の源頼朝と密かに盟約を結んでいた。

頼朝は法皇から、すぐにも上洛するよう促されるが、留守の間を奥州の藤原氏に狙われるという理由から、自分の代わりに、義弟の範頼・義経を派遣し、京の動静を探らせる。

鎌倉の軍勢が近づきつつあるとの知らせを受けた義仲は、鎌倉勢の進攻を防ぐための配陣を思案する。しかし、法住寺殿の戦いの後、義仲の行動を批判し、離脱した武将が多く、義仲のもとに残ったのは、信濃国で挙兵したときから付き従ってきた家臣たちだけであり、十分に防げる状態ではなかった。

義仲は、平家との和平交渉に乗り出す。平家の棟梁 平 宗盛は和平に前向きだったが、平家方の武闘派がこれを拒否したため、義仲の目論見は外れてしまう。

義仲の叔父 源 行家は、義仲を避けて京を出て、室津(兵庫県たつの市)

で平家軍と戦うが惨敗。行家は河内国(現在の大阪府)に逃れるが、義仲が苦境に立たされていることを知り、義仲を攻める構えを見せた。

頼朝に追われていた行家を匿った義仲としては、恩を仇で返す行家の行動を許すことはできず、家臣の樋口兼光に500騎を預け、行家を討つよう命じた。

追い打ちをかけるように、平家を京の都から追い出した際、義仲に味方した比叡山延暦寺も義仲のことを見限った。

都では、義仲が法皇を奉じて北陸へ向かうのではないかという噂が広まっていた。しかし、義仲は、迫りくる鎌倉の軍勢の前に、動こうにも動けない状態だった。

四面楚歌に陥った義仲。わずか半年前は、約5万騎を率いて意気揚々と入京したのに、なぜ、こんな事態になってしまったのか。

寿永三年一月の寒空の中、義仲は北陸の方向を遠い目で見つめていた。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461

◀焼け落ちる法住寺殿(「義仲勲功図會」より)



◀義仲四天王(「義仲勲功図會」より)



猛将 木曾義仲

「俱利伽羅峠に想いを馳せて」

義仲、巴の魅力を全国に！
大河ドラマ「義経」プロジクト
完結中!!

第54回 動かない義仲

◀伊子との別れ(「義仲勤王図會」より)



寿永3年(1184)1月、源・範頼・義経率いる鎌倉の軍勢が京に近付きつづけた。源・頼朝に対抗するため、義仲は後白河法皇に、日本中の武士に動員をかける軍事的権限を持つ「征夷大將軍」に任ずるよう要求する。法皇は抵抗できず、義仲を征夷大將軍に任じた。「源平盛衰記」に記されている(近年の研究では、義仲が任ぜられたのは「征夷大將軍」ではなく「征東大將軍」であったとされている)。

しかし、義仲に味方する武將はおらず、義仲は少ない軍勢を各地に派遣しなくてはならなかった。義仲は宇治方面に叔父の志太義広や仁科、高梨ら300騎を向かわせ、勢多方面には今井兼平に500騎を預け、京への進入を防ぐよう命じた。義仲とともに京を準備するのは、わずかな兵のみであった。

義仲は、京で娶った藤原基房の娘伊子のもとに向かう。歳の差はあったが、義仲は幼い妻を愛おしく思い、

離れがたかったのである。鎌倉の軍勢が近づきつつあるのに、動こうとしない義仲。このままでは座して死を待つばかり。

そのとき、家臣の越後中太能景と津波田三郎が、義仲を諫めるため、庭先で自害してしまふ。この様子を見た義仲は、意を決し、幼い妻を戦乱に巻き込まないよう配慮し、屋敷を出る。

宇治も勢多も鎌倉の軍勢を防ぐことができず、敵が京の町中になだれ込んできた。

義仲は法皇の御所へ向かうが、門が閉ざされていた。そこに、鎌倉の軍勢が近づいてきたとの知らせを受け、義仲はやむなく御所を立ち去る。

義仲と入れ替わりに義経が軍勢を率いて御所にたどり着く。義経は法皇に拜謁した後、御所の警護にあたる。

義仲は、押し寄せてくる鎌倉の軍勢と戦うが、多勢に無勢で、次々と兵を失っていった。

勢多には今井兼平がいる。義仲は、何度も敵に囲まれながらも戦い抜き、少ない兵を率いて勢多方面へ向かう。

問い合わせ 商工観光課
(67)1760 内線461

猛将 木曾義仲

「俱利伽羅峠に想いを馳せて」

義仲、巴の魅力を全国に！
大河ドラマ「義経」プロジクト
完結中!!

第55回 最後の5騎

◀「義仲勤王図會」に描かれている巴御前



鎌倉の軍勢に京への侵入を許してしまつた木曾義仲。

義仲は、わずかな兵を引き連れ、腹心の今井兼平が守る勢多方面へと向かう。鎌倉勢は義仲を逃すまいと、猛追してくる。次々に義仲の兵が討ち取られ、7騎となつてしまつた。

この7騎の中に、巴御前が残つてゐた。巴御前は、義仲が平家打倒のため拳闘した後、常に義仲のそばに身を置き、ともに戦つてきた女性で、「平家物語」には、美しくも「大力の強弓精兵」「騎当千の兵者」と記されている女武者であった。

義仲一行が近江国(現在の滋賀県)の打出浜にたどり着いた時、勢多方面から駆けてくる一団がいた。兼平らであった。

「殿、ご無事で何よりでした」

「幼き頃、死ぬ時は一緒に誓つた仲。恥を忍んで京から逃げ落ち、ここまで来たのは、その誓いを守るため。兼平、お前に会いたかった」

「ありがたきお言葉。しかし、敵はすでにあたり満ちあふれてお

ります」

「うむ、ここが最後の戦いの場となろう。兼平、旗を掲げよ」

兼平が旗を掲げると、逃げ落ちてきた義仲方の兵300騎が、義仲を慕つて集まつてきた。

義仲は、兵たちに向かって号令をかけた。

「これから最後の戦いに挑む。命を惜しむな。われに続け！」

義仲は愛馬「鬼草毛」にまたがり、鎌倉方に勇猛に切り込んでいった。兵たちも、主君に遅れるなど、鎌倉の大軍に果敢に攻め込んでいく。

義仲が「われこそは朝日將軍源義仲なり！」と大音声をあげると、大將首を取つて手柄を立てようとする鎌倉方の將兵たちが、義仲めがけて攻めてきた。何度も何度も縦横に駆け抜けるたびに義仲方の兵は失われ、ついに、義仲、兼平、手塚別当(盛重)、手塚太郎光盛、そして巴御前の5騎だけとなった。

巴御前はまだまだ戦う気力に満ちあふれてゐた。

義仲は、あることを決意し、巴御前をそばに呼び寄せた。

問い合わせ 商工観光課
(67)1760 内線461



◀敵将を討ち取る巴(「義仲勲功図會」より)

猛将 木曾義仲

義仲、巴の魅力を全面に！
大河ドラマ「義経」ロケ中！
発動中!!

倶利伽羅峠に想いを馳せて

第56回 別れ

巴をそばに呼び寄せた義仲。巴には生き延びてほしいと思ひ、戦場から去るよう告げた。

「巴。お前はこれから落ち延びよ」

「いいえ、私は幼き頃から、ずっと殿のそばで戦つてまいりました。私はまだ戦えます。最後は殿のおそばで思つております」

巴は決意を込めた目で義仲にうたえた。

「ならぬ。朝日將軍とまで呼ばれた大將が、最後の戦場までも女を連れていたと言われては名が辱る。巴よ、あなたは、落ち延びよ。そして、生きて、わしの生き様を後世に伝えてくれ」

義仲は巴をじっと見つめ、自分の言うことを聞くよう目で諭した。その眼差しには、巴への労り、感謝の念、そして、義仲の巴への深い愛情が含まれていた。

立ち去るよう命じられた巴は一瞬、悔しさを

に唇を強くかみしめたが、義仲の愛情を感じ取り、覚悟を決めた。

「分かりました。殿の仰せのとおり」

巴が最後にい敵と戦いたいと思つていたところ、そこに鎌倉方の新将が現れ、武蔵国(現在の埼玉県)の武將恩田八郎師重が戦いを挑んできた。

師重は大力の剛の者であったが、巴は師重と馬上で組み合い、師重の首を討ち取ったと「平家物語」に記されている。

巴の勇ましい戦いぶりを見届けた義仲。

「さらばだ。巴。達者でな」

巴は義仲の別れの言葉に応えたかったが、想いがあふれ、胸がつまり、声が出なかった。巴は義仲に涙を見せまいとして馬首を東に向け、ただ一騎、戦場から離れていった。

ついに、今井兼平と二騎だけになった義仲。

寿永三年(1184)正月二十日は夕暮れに近づいていた。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461

猛将 木曾義仲

義仲、巴の魅力を全面に！
大河ドラマ「義経」ロケ中！
発動中!!

倶利伽羅峠に想いを馳せて

第57回 猛将 逝く

義仲と今井兼平は、栗津(現在の滋賀県大津市)の湖のほとりを騎馬で進んでいた。一時、戦場とは思えない静けさが辺りを包んだ。

「いつもは何とも思わない鎧が、今日は重く感じる」

ふと、義仲がつぶやいた。兼平は、義仲が疲れ切っているのだと察した。辺りには朝日將軍の首を取ろうと、鎌倉の軍勢が探し回っている。雑兵などに殿の首を渡してなるものか。

兼平は義仲に向つて告げた。

「殿、ご自害なされませ。朝日將軍と称えられた殿が雑兵などに討たれてはなりません。私はここで敵が来るのを防ぎます。さあ、早く」

義仲は拒もうとするが、鎌倉の軍勢が現れたため、兼平に急かされ、後ろ髪ひかれる思いで、松原へ駆け行った。その時、義仲の乗った馬が薄水を踏みぬき、泥田にはまってしまった。馬はもがくがどんだん沈んでいく。

義仲が、兼平の安否を気遣い、後ろを振り向いた、その瞬間。

鎌倉の軍勢から放たれた矢が、義仲の兜の下の眉間を貫いた。

「くうっ」

義仲はのけぞり、馬から落ち、空を

向いて仰向けに倒れた。

粉雪が舞い落ちてきて、義仲の頬を濡らした。

薄れゆく意識の中、義仲は、木曾で過ごした懐かしい日々を走馬灯のように思い出していた。

義仲は、天に向かって手をかざした。

「ああ、帰ろう、木曾へ」

そうつぶやいた後、がくつと首を垂れ、腕が地面に落ちた。

「木曾殿を討ち取ったぞ!」

「おおー!」

義仲を討ち取った武將 石田為久の軍勢が、関の声をあげた。

兼平は、その歓声を聞き、義仲の最期を悟った。

「もはや、誰かのために命を張ることはない。鎌倉の者どもよ、朝日將軍木曾義仲公の乳母子で、義仲四天王今井四郎の死に様を目に焼き付けたまえ!」

そう叫んで、兼平は刀を口にくわえ、馬から飛び降り、体を太刀に貫かせて自害した。

堅い絆で結ばれた、主従二人の最期であった。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461

猛将 木曾義仲

俱利伽羅峠に想いを馳せて

第58回 義高と大姫

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中！！



木曾義仲が栗津（滋賀県大津市）で討ち取られたという報せが鎌倉の頼朝のもとにもたらされた。

義仲の息子義高は、義仲と頼朝との相互不可侵の約定により、頼朝の娘大姫の婿として頼朝に預けられ、鎌倉にいた。

義高は11歳、大姫は6歳。幼い二人は夫婦というよりも仲のいい兄妹のように、仲睦まじく暮らしていた。頼朝の妻北条政子も、二人をほほえましく見守っていた。

しかし、義仲を討ち取った頼朝は、将来、義高が成長し、自分を父殺しの仇として復讐されることを恐れ、義高を討ち取ることにした。

その動きを察した大姫の侍女たちは、義高を逃す手立てを整える。

深夜、義高は密かに屋敷を抜け出し、父義仲ゆかりの地へ向かう。しかし、義高の逃走を知った頼朝は、すぐさま追っ手を差し向ける。

義高は、人間（現在の埼玉県狭山市）で捕まり、頼朝方の武將に討ち取られた。享年十二。

義高を討ち取った武將は、意気揚々と頼朝に報告したが、そのことが大姫に伝わってしまう。大姫は、義高の死

を深く嘆き、悲しむ。

もともと体の弱かった大姫は、衝撃のあまり食事がのどを通らなくなり、だんだんとやせ細っていった。政子は頼朝を強く非難するが、頼朝はやむを得ない処置だったと抗弁しつつ、義高を討ち取った武將を「配慮が足りなかった」として斬首に処した。

頼朝は、大姫を天皇の妃として入内させようと画策するが、大姫はそれを拒み続ける。やがて、大姫は心痛により寝込んでしまい、20歳という若さで亡くなってしまった。

父同士の確執に翻弄された義高と大姫。お互いに信じあつた幼い二人の、美しくも、はかない恋物語であつた。



義高と大姫

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461

猛将 木曾義仲

俱利伽羅峠に想いを馳せて

第59回 夢よと変わる

世の中に：

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中！！



巴は義仲が討ち取られる直前まで、ともに戦っていたが、義仲に生き延びるよう諭され、戦場から離脱していた。

「源平盛衰記」には、巴は鎌倉の軍勢に捕まり、処刑されるころであつたが、源頼朝の御家人である和田義盛が巴を見初め、助命を願ひ出たことから、生き延びることができたと記されている。

巴は義盛の妻となり、やがて、朝比奈三郎義秀を産んだと伝わっている。大力の義盛と女武者巴の間に生まれた義秀は勇壮無双の武者となった。

時が流れ、鎌倉幕府の初代将軍源頼朝が亡くなった後、北条氏が勢力をつけ、執権政治が行われる。

幕府の実権を握った北条義時は和田義盛を陥れ、和田合戦が起こる。義盛は、義秀とともに奮戦するが、力及ばず、討ち取られてしまう。

独り取り残された巴は、俱利伽羅峠の戦いで、ともに戦った武將石黒氏のもとに身を寄せる。

巴は出家して尼となり、兼生尼と称して、義仲らの菩提を弔いながら余生を過

ごした。

頼朝の死後も、戦乱の世は続き、後鳥羽上皇と北条義時率いる鎌倉幕府との間で「承久の乱」が起こる。その戦乱を目の当たりにして、巴は何を思つたであろうか。

巴は、91歳という長寿を全うし、現在の南砺市（福光）で亡くなる。

兼生尼の辞世の句

「まほろしよ夢よと変わる世の中に
など涙しもつきせざるらん」

動乱の世を力強く生きた巴。ようやく、巴は、義仲のそばに戻つていった。

5年にわたり連載を続けてきた「猛将 木曾義仲」。義仲に関する話題はまだまだたくさんありますが、今月号にて連載は終了となります。

義仲が大勝した「俱利伽羅峠の戦い」。激しい戦いが繰り広げられた古戦場に立てば、義仲が何を想い、何を目指して戦っていたのかを感じることができるともできません。連載を通して、義仲の波乱万丈の生涯に想いを馳せていただければ幸いです。

ご愛読いただき、ありがとうございます。

問い合わせ 商工観光課

☎(67)1760 内線461



「巴塚」(南砺市)